阿波國すきま漫遊記

■阿波市吉野町柿原
モルタルで精巧に作られたシャチホコがかわいい。軒の裏側にみえる櫛の歯状の材(垂木:たるき)まで、モルタルで作ってあるのがすごい。

阿波國すきま漫遊記

VOL.1 小さな城

［取材・文・写真］　深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

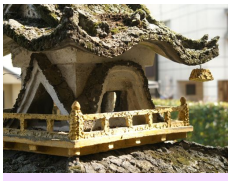
はじめに

関東で生まれ育った私が、転職で徳島に引っ越して来てから6年になる。いわゆるIターン組というやつだ。そんな他所者が「あわわ」に徳島県内の紹介記事を書くことになった。

「住めば都」という諺があるが、その土地に長く住んでいると、自分の身の回りにあるものが世の中の標準だと思えてしまうものだ。ところが他所から来た者にとっては、生粋の阿波っ子にはありふれて見える風景がいちいち珍しいのである。この連載では、日常の「すきま」にひそむカルチャーギャップ的な物件に焦点を当てて紹介していこうと思う。その第一回として、道ばたにある小さな城を紹介してみたい。

眉山城

眉山のふもと、佐古一番町。私が「ハギレ横丁」と呼ぶ一角にその城は建っている。高さは1・5mほどでモルタル造。4層の大天守、3層の小天守、隅櫓からなる山城形式の城だ。これを築城したのは、近くにあった銭湯のご主人なのだという。城だけでなくお寺も好きだったようで、近くの薮をよく探すと氏が建立したとおぼしき寺院や鐘つき堂も見つかる。さらにお宅の庭には日光東照宮の陽明門が建っている。



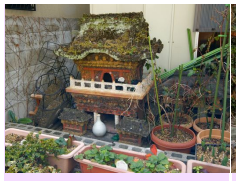
▲ 眉山城・小天守の欄干
欄干の擬宝珠や風鐸まで再現してある。ただし欄干の内側に破風がある造りはちょっと不自然だ。

▲ 眉山城・三重塔
なぜか城内に三重塔が建っている。これはあとから移築されたものかも知れない。

▲ 眉山城・小天守
威風堂々たる城だ。こうして見るとミニチュアとは思えない迫力。

▲ 眉山城・遠景
城は遍路道に面している。何十年もこの場所でお遍路さんを見守り続けてきたのだろう。

▲ 眉山城・謎の廃寺
眉山城近くの薮を探すと、いくつものお堂が見つかる。



▲ 眉山城・陽明門
もと銭湯だったという城主のお宅にある。日光東照宮の陽明門のミニチュア。これは力作だ。

柿原城

次に紹介するのは、阿波市吉野町柿原の街道沿いにある城。城の前には石碑があって道からは気付きにくいが、緑色の瓦に真っ赤な軒という道教寺院のようなカラーリングは鮮烈だ。天守台の下部は盛り土になっているので、平山城形式としておこう。この城の特徴は屋根の裏側の垂木(たるき)が作り込んであることだ。吉野川市や石井町の神社を巡ると、とても精巧に出来たモルタル造の末社を見かけることがあるが、この城のディテールはどことなく神社の小祠を思わせる。

▲ 柿原城・全景
石碑の後ろにあるため、気付きにくい。右側の垣根の上に小天守の屋根が見える。

浦山城

最後に紹介するのは、つるぎ町貞光浦山の農家の倉庫の横にある城だ。築城したのは上板町に住む人で、この農家のご主人の従兄弟にあたる人だという。この城のモデルはおそらく大阪城ではないかと思う。典型的な平城である。5層の壮大な天守閣で3層から4層へ貫く大きな千鳥破風が特徴的だ。

▲ 浦山城・大天守
天守台の石垣が丹念に作られている。巨大千鳥破風と、2連の千鳥破風は大阪城を思わせる。

▲ 浦山城・小天守
造形は小天守のほうが精巧だ。後から作ったのだろうか。大棟や下り棟の瓦のリアリティがすごい。

▲ 眉山城小天守
メンテナンスを怠ると、城の中から植物が生えてくるというアクシデントも発生。

ところで、今回紹介した3つの城の写真を見ると、ある共通点に気がつく。作者も造形スタイルも異なるのに、どの城も小天守を備えているのである。作者たちは天守閣だけの城にはリアリティがないと考えたのだろうか。すきま物件観賞の醍醐味は、どうでもいいような共通性の発見による体系化と、どうでもいいような差異にもとづく評価基準の確立にあると言えるのだが、どうやら小天守の存在は小さな城観賞において重要なポイントとなりそうだ。

■国実の時計台
すごく精巧な造形。徳島を代表する時計台といっていいだろう。国の登録有形文化財にしてもよいレベル。

阿波國すきま漫遊記

VOL.2 時計台

［取材・文・写真］　深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

時計台とは

日本には1億人以上の人間が住んでいる。その中には神様や幽霊が見えるという人もたぶん1万人くらいはいるのではないだろうか。私自身、これまでの人生で霊が見えるという人には何人か会ったことがある。だが「道ばたで時計台を見かける」と言う人には出会ったことがない。今回は幽霊よりも見えにくい「時計台」について紹介しよう。

国実の時計台

ＪＲ徳島線下浦駅を降りて道なりに北へ進むと国実八幡神社の瑞垣に突き当たる。時計台はＴ字路の真正面の見つけやすい場所に建っている。だがどれだけの人が時計台に気付いているだのだろう。目に映るものを理解出来なければ、それは見えないのと同じなのである。時計台はモルタルの洗い出し仕上げで、丸首型としては例を見ないほど精巧にできている。国の有形登録文化財にしてもよいレベルの物件と思う。皇紀２６００年(昭和15年)を記念して建てられたと書かれている。当時は日中戦争の最中であり、祭典は戦意高揚のための祝賀行事であった。この時計台の随所に海軍のシンボルが施されているのはそのためであろう。

▲ 国実の時計台
この道を通る人の何%に、この時計台が「見えている」のだろうか。

時計台の建立には３回のブームがあったと考えられる。最初のブームは戦前の軍国主義の地域的依り代として。第２のブームは高度経済成長時代の学校へ寄贈。いずれも世の中がひとつの方向を向いたお祭りムードの時期だというのは興味深いところだ。第３のブームはバブル経済崩壊から現在に至るまでで、自治体や奉仕団体等が建立しているが、デザインに情念が感じられず、観賞の対象としてはやや不適と言えよう。私が特に興味を持っていて今回紹介するのは第１次ブーム、すなわち軍国主義時代の遺構としての時計台である。この時代の時計台は全国で確認でき、その様式はほぼ共通している。

▲ (参考) 丸首型時計台
香川県高松市。国実時計台と同じ「丸首型」。戦前のものと言われていて、おそらくご大典記念で建てられたと推測される。支柱には「時を大切に」と書かれているのがおもしろい。

▲ (参考) ぼんぼり型時計台
埼玉県飯能市。勝命時計台と同じ「ぼんぼり型」。支柱に「御大典記念」と書かれている。山奥の三差路の辻にある。時計台はY字路やT字路に作られることが多いようだ。

▲ (参考) 石碑型時計台
埼玉県小川町。椿泊時計台と同じ「石碑型」。戦前からアリ、一度自動車事故で破損して修理されたものだという。ここも古い道の分岐点。こうしたY字路は、古来から特別な場所とされてきた。

勝命の時計台

撫養街道を市場から阿波町に入って、旧道を進むと、交差点の角にぼんぼり型の時計台がある。この時計台の定礎は昭和４年となっている。おそらく昭和３年末の昭和天皇の即位式典(御大典)を記念して建てられたものだろう。私が初めて時計台というものに気付いたのは埼玉県で見かけたぼんぼり型の時計台だったので、ぼんぼり型には個人的には思い入れが深い。勝命の時計台は公民館の一角のような場所にあるが、建物の補修や建替えにともなって取り壊される恐れがある心配な物件だ。

▲ 勝命の時計台
時計台はこんな辻にさりげなく建てられている。

◀ 勝命の時計台
「勝命(かつみ)本村青年区會昭和四年之を建てる」とある。時計が無くなっているのが淋しい。ぜひ取り付けてほしいものだ。

椿泊の時計台

椿泊といえば出格子(でごうし)の古い町並みが見どころなのだが、見逃せないのが佐田神社門前の時計台だ。形態は石碑型で定礎によれば御大典記念となっている。昭和の初期は椿泊が遠洋漁業で最も栄えた時代で、現在の出格子の町並みが成立した時期でもある。アールデコと古典復古様式の影響を受けたデザインはいかにも昭和初期という感じ。椿泊の歴史を物語る物件とも言える。末長く残って欲しいものだ。

▲ 椿泊の時計台
神社で境内にアールデコ様式のモニュメントを見かけることは意外に多い。ほとんどは戦前の国家神道の時代の遺構なのだ。

▲ 椿泊の時計台・背面
背面には階段がある。
かつては定期的に人がゼンマイを巻いたのだろう。

私はこれまで県内を詳しく探したつもりだが、まだ戦前の時計台が残っている可能性はある。神社などに残っている時計台をご存知の方がおられたらぜひ知らせて欲しい。

阿波國 すきま漫遊記

VOL.3 映画館

［取材・文・写真］　深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

徳島県の古い映画館

徳島県の古い映画館と言えば、脇町のオデオン座、貞光町の貞光劇場、神山町の寄居座を取り上げるのが相場だ。しかし県内には他にも古い映画館が残っている。

喜楽座（鳴門市）

ＪＲ板東駅の駅前に「KIRAKUZA」というオーナメントを掲げた建物がある。喜楽座という芝居小屋で、後に映画館としても使われた。クリーム色のモルタルやアールデコ風デザインは大正時代の流行だ。調べてみると実に大正１５年に建てられたものだという。オデオン座が昭和９年、貞光劇場が昭和７年だから、喜楽座は県内最古の劇場建築なのである。もし内部の保存状況が良いなら、将来は市指定文化財になってもおかしくない建物だ。もっとも昨今の地方交付税削減下では、自治体が大物の有形文化財を新規に選定することに期待はできない。このような未来に残してゆけない風景は、文化財よりも貴重だと言えるのではないだろうか。※残念ながら２０１０年現在、この建物はもう取り壊されて見ることはできない。

▲ 喜楽座・楽屋跡
裏側にはかつて楽屋があって、高窓から役者や顔を見せることもあったとか。
屋根は手仕事で圧延した鋼板が使われているそうで、初期のトタン屋根の例としても貴重だ。

▲ 喜楽座・外観
二階の左右にある窓には拡声器があって、夕方の上映が始まる前には音楽を流した。芝居小屋の触れ太鼓のようなものだったのだろう。大麻比古神社のあたりまでその音楽は聞こえたという。

加茂座（阿波市）

阿波市役所前から鳴門池田線を東へ少し行ったところにあるのが加茂座だ。建ったのは戦前。開業当時は芝居小屋を兼ねていて座布団を敷いて映画を観たそうだ。この加茂座、岩津の映画館、阿波本町にあった川人酒造の映画館の３館は同じ映画を共有して上映していたらしい。映画フィルムは２０分程度のリールに分かれているので、上映時間を少しずつずらし、一つのリールが終わるとオートバイで次の劇場にリレーしていたとう。トラブルがあってリールが届かないことも度々あったとか。実におおらかな時代だったのだ。

▲ 加茂座・外観
映画館の裏手には、旅役者が泊まれる楽屋が残っている。かつて人気が高かった春子太夫も泊まったのだという。閉館後は縫製や電気部品の組立工場になったため、内部は改装されてしまっている。

▲ 加茂坂
映画館の前は「加茂坂」という名前の坂で、以前は呉服屋などが並ぶにぎやかな商店街だったという。建物の屋根には拡声器の櫓があり、開演前に音楽を流したという。

阿波劇場（阿波市）

市場町にはかつて二ヶ所の映画館があった。一つは箸供養にあった市場座で、もう一つが中心街にある阿波劇場だ。現在は縫製工場になっているが、建物のガワは当時のままだと思われる。

▲阿波劇場・正面
ここで無声映画を観たというおばあちゃんは、日開谷川の上流のほうから歩いて観に来たと語ってくれた。

▲ 阿波劇場・背後
いまは縫製工場になっているが、裏から見ると映画館の面影がある。

市場では生き字引が中々見つからなかったが、市場座は芝居小屋兼用、阿波劇場は映画中心だったという証言が多い。

立江の映画館（小松島市）

立江寺の門前の路地を入ったところに、古い映画館がある。名前は立江座でも立江劇場でもない。名前はなかったという証言も多いので、「立江の映画館」としておく。この映画館を建てたのは外地から引揚げてきてからしばらく移動映画を営んでいた人だという。営業期間は短かったようだ。その後は倉庫に使われていたということだから内部の設備はほとんど残っていないだろう。

▲立江の映画館・正面
少し引っ込んだところにあるので、この映画館に気付く人は少ないだろう。

▲立江の映画館・側面
映画館の横は昔は広い空き地で、立江寺の大祭にはサーカスの小屋が掛かったという。

徳島県には芝居小屋を兼ねた映画館が相当数あったようだ。特に、吉野川の北岸には多くの小屋が分布していた。旅芸人や地芝居などを受け入れて楽しむ素地は、かつて県内で人形浄瑠璃が盛んだったことと深く関係している。映画によって浄瑠璃や芝居が衰退し、テレビによって映画が衰退したというのが県内の娯楽の歴史だが、今回紹介した物件はどれもその歴史を実感できる証人なのである。

これまでに私は５０ヶ所ほどの芝居小屋跡を訪ねてきたが、残念ながら建物が残っているのはここで紹介しただけではないかと思う。いつか建物の残っていない劇場跡も紹介できればと思う。

■ 神山町下分の流れ橋
橋げたがワイヤーでつながっている様子がよくわかる。橋脚には転石の衝突をガードする鉄板が付いている。

阿波國すきま漫遊記

VOL.4 流れ橋

［取材・文・写真］ 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

人と川の関係

関東から徳島に移住してまず感動したのは吉野川の川としての豊かさだった。ここで言いたい豊かさとは単に自然が豊かという意味ではない。第十堰から下流はしょせん人工的な放水路であって、自然の川ではないからだ。手付かずの自然という意味でなく、川と人間の関係の豊かさに感動するのである。毎日の通勤で目にする川漁師や、沈下橋、渡し舟などの景観は、ここではまだ川と人の良好な関係が失われていないことを物語っている。

前世紀の末に、21世紀は心の豊かさを追究する時代になる言われながら、いまの日本人は小さな失敗も許さないような窮屈な社会を作り出している。心に余裕がないのだ。その基準に従えば、沈下橋などは転落の危険がある欠陥構造物とみなされるだろう。だから逆に、沈下橋のようなルーズさが許容される社会があるとしたら、それは人の心に余裕のある真に豊かな社会だとも言えるのではないだろうか。

こんにゃく橋

だから鮎喰川河口のこんにゃく橋が撤去されると知ったときはショックが隠せなかった。

私の得意分野は建築なのだが、橋やダムなどは土木の分野である。少し畑違いということもあって、毎日こんにゃく橋を眺めながらも一度もきちんと訪れたことがなかった。台風で壊れたままのこんにゃく橋が撤去されると知って、きちんと見ておくのだったと激しく後悔したがすべては後の祭りである。私の橋めぐりは、この時から始まったのだった。

▲ 徳島市春日町のこんにゃく橋
2004 年の台風で橋げたが流されたまま、ついに元の姿に戻ることもなく撤去された。全国にも誇れる景観だったと思うのだが。

木造の実用橋のいろいろ

橋と言ってもいろいろなタイプがあるが本稿で採り上げるのは観光用ではない「実用橋」である。なかでも木造の実用橋はもはや絶滅危惧種と言ってもいい。木造の実用橋は、丸太橋、つり橋、土橋、流れ橋に分類できる。県内のつり橋はかずら橋が有名だが観光用であって、実用橋ではない。だが林業用のつり橋には木製の橋板のものがいくつか存在する。土橋とは木の橋げたの上に土やアスファルトを敷いて平らにした橋だが、県内では本格的な物件は思い当たらない。流れ橋とは橋げたが橋脚に固定されていない簡易な造りの橋で、増水時に橋げたがわざと流されるようになっている橋である。今回はこの流れ橋をいくつか紹介しよう。

▲ 上勝町旭の流れ橋(1)
橋脚はコンクリート製で頑丈そうだが、橋げたはまるで丸太橋のよう。橋の下は深みなので渡るのにはかなりの勇気がいる。

▲ 徳島市八万町の流れ橋
こんにゃく橋の近くにかかる橋。水面からの高さがないので、増水時にはすぐに流されることだろう。

▲ 徳島市八万町のこんにゃく橋
徳島市内にもう一つこんにゃく橋の名を持つ橋がある。八つ橋ふうの橋げたがフォトジェニック。いま県内で最も保護したい橋だ。

▲ 徳島市飯谷町の流れ橋
私が知ったときにはすでにこの姿になっていた。おそらくこの橋脚も、台風のたびに櫛の歯が欠けるように消えてゆくことだろう。

流れ橋の魅力

流れ橋の魅力は自然の力に逆らわないシンプルさだ。雨が降れば川は増水する。増水すれば川は渡れない。何百年と変わらず続いてきたシンプルな生活がそこにはある。流れ橋から見えてくるこのシンプルな暮らしこそ、現代の日本では最も得がたいぜいたくなライフスタイルなのである。

▲ つるぎ町貞光の流れ橋
橋脚の高さがそろっていないため橋板が波打っている。橋幅は広めなので自転車が乗ったまま楽々と通れるだろう。

▲ 神山町阿野駒坂の流れ橋
激しく蛇行する鮎喰川の先行谷を短絡する間道に掛かる橋。焼山寺から大日寺への遍路道はこの橋を通っている。

▲ 神山町阿野屋那瀬の流れ橋(2)
増水時に行ってみた。奥のほうに橋げたが流されているのが見える。元に戻すには小型のユンボが必要になるのだという。

▲ 神山町阿野屋那瀬の流れ橋(1)
遠目にはのどかに見えるが、水面からの高さがあるので、実際に渡ってみるとかなりの迫力がある。

▲ 上勝町旭の流れ橋(2)
橋げたを結びつけておくワイヤーは意外に細い。何度も流されているのだろう。橋げたの角が丸くなってしまっている。

■阿波葉生産農家・元山勝市さんの畑
青々とした阿波葉は遠目にも見わけることができる。畑のそばに立つと、空気にチョコレートのような独特の甘い香りがする。

阿波國すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見―
VOL.5 阿波葉

阿波葉との出会い

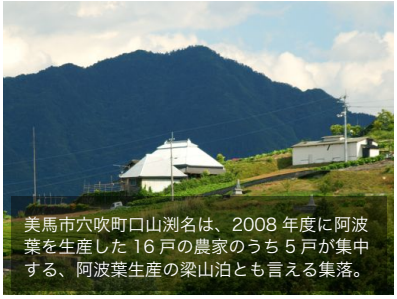
半田町をドライブしていたとき、道ばたに青々したタバコ畑があるのに気付いた。「もしかしてこれ阿波葉？」車を止めて仕事中の農家の人に話を聞くと確かに阿波葉(あわは)だという。そのとき話を聞いて以来、私はこの品種に興味を持つようになった。

阿波葉はキセルで吸うための刻みタバコの品種で江戸時代初期から日本で作られてきた在来種のタバコだ。現代の紙巻きタバコに使われているのは昭和初期に導入された黄色種と呼ばれる外来の品種である。

消えゆく品種

明治大正時代に県西地方に大きな富をもたらしたタバコはまぎれもなく阿波葉であり、「阿波」の名を冠するにふさわしい作物なのだ。だが時代の趨勢でかつて一万人以上の農家で栽培されていた阿波葉も今年はわずか十六戸で育てられているにすぎない。しかも阿波葉は二〇〇九年度で生産が打ち切られることになっている。タバコは専売だから農家がいくら希望しても生産を続けることはできない。

阿波葉は、外来種には不向きな標高の高い地域でも生産できる。徳島に適応した品種なのだ。



美馬市穴吹町口山渕名は、2008年度に阿波葉を生産した16戸の農家のうち5戸が集中する、阿波葉生産の梁山泊とも言える集落。

独特の文化

阿波葉と黄色種では収穫後の熟成の方法が大きく異なる。機械化が進んでいる黄色種に対し阿波葉の熟成は手作業が中心。このため阿波葉の生産には独特の仕事・言葉・道具・建築をともなう。私が阿波葉に魅かれるのは阿波葉がこのような文化を持つからである。つまり阿波葉の消滅は単なる品種の切り替えではなく、四〇〇年続いた文化が二〇〇九年を境に消滅することを意味しているのだ。

◀「ムッシャ(蒸屋)」呼ばれる乾燥蔵。黄色種の乾燥蔵とは機能・構造がまったく違っている。

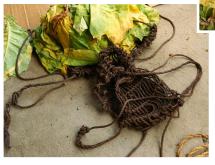
古い形態のムッシャは室内に炉があり、床下(地下)から通風するための焚き口があるのが特徴だ。▶

阿波葉の特徴は、屋外での乾燥と低温で長時間をかける発酵工程。収穫期には農家の庭先を葉が埋め尽くす。

まだ遅くはない

実は、阿波葉の生産が中止されると決まったとき、もし途中で生産農家が十戸を下回った場合は二〇〇九年を待たずに中止するという内示があったという。阿波葉は手間がかかるうえ農家の高齢化も進んでいるため生産も年々困難になってきたからである。しかし阿波葉農家はこの品種を見捨てることなく最後まで誇りを持って生産を続けてきた。おそらく来年もほとんどの農家が生産を続けることだろう。もしこのレポートを見て少しでも興味を持ったらまだ遅くはない。この号が書店に並ぶころ県西では阿波葉の収穫が最盛期を迎えているはずだ。まだこの誇り高い品種の最後の姿を目に焼き付けることができるのである。

「連縄(れんなわ)」という縄にタバコの葉を一枚一枚編み込んでいく。▶



◀急斜面で栽培されることが多い阿波葉の収穫にはシュロ縄で編んだ「もっこ」が活躍する。

「連干し(れんぼし)」この光景が見られるのも来年までだ。

深草　縁夫
関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

上勝町福原の清井製材の産業用水車。これまで水車写真集などで紹介されたことのない隠れた名品。県内に現存する水車の中では最も立派なもののひとつといっていいだろう。

阿波國すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見―
VOL.6 上勝の水車小屋群

本物の水車を見たことあるか？

真珠の鑑定士を育てる教育法というのを聞いたことがある。それによると一級品と二級品を並べて違いを説明するというやり方ではダメで、来る日も来る日もひたすら一級品の真珠だけを見せるのだ。そうすると自然に二級品も見分けられるようになるのだという。この連載ではいずれ県内の色々な水車を紹介するつもりだが、スタートは上勝町に残る本物の水車小屋を見ることから始めたい。水車小屋とはどんな建物で、どんな場所にあるのかというありのままを見て、本物を見分ける鑑定眼を身に付けてほしいと思う。

田野々の水車小屋

県道16号線に面しているので眼力があれば発見は容易だ。水車小屋のシンボルである水輪（みずわ）は失われて建物だけが残っている。「岡田さんのクルマヤ」呼ばれ個人が所有していた水車だったという。現在は地元の人からも忘れられているようで、一〇〇ｍも離れていないところで畑仕事をする人に訊ねても、ここに水車小屋が残っていることを知らない人がいたほどだ。実は水車小屋を探しているとき、地元の人に「もう水車なんて残ってない」と言われても、探すと簡単に見つかるという体験を何度もしている。水車小屋は記憶から消えやすい存在なのだろうか。

▲内部は搗き臼が１つというシンプルな構成。バラバラになった水輪が内部に残っていた。

▲横の沢から鉄管で水を引いて、水輪の上から注いだ。このような方式を上掛けという。

下地の水車小屋

傍示の下地という集落で見かけた水車小屋。近くの農家の納屋として使われている。やはり水輪は失われているが、まだ心棒が残っているので、内部の機構も残っている可能性がある。

水車小屋というと、小川のほとりに茅葺きの小屋があり、豊かな水に水輪を浸しているというイメージがあるが、そういう水車小屋は非常にまれだ。実際にはトタン葺きが多いし、水車を稼働させる川は、ひとまたぎにできるような側溝程度の幅の水路があれば十分なのである。

▲水車が作られる条件は、小さくても１年中水が涸れない沢があることだ。

▲水輪の中央くらいの高さから水が注がれた。この掛け方を胸掛けという。

水車小屋を見つけるには、まず導水路・排水路があるかどうかがポイントになる。水輪は腐食しやすく、定期的に交換や補修が必要な部品だから、残っていないと思ったほうがよい。つまり水車小屋を探すには水車を探していたのではダメなのである。

府殿谷の水車小屋

生実の中瀬津という集落の４軒の農家が共同で利用してたという水車小屋。この上流にも２棟の水車小屋があったという。標高は五〇〇ｍほどあり、県内で最も標高の高いところにある水車ではないだろうか。

▲周囲は棚田が広がるが、小屋は薮に被われていて見つけにくい。

▲内部は搗き臼×２と碾き臼×１の本格的な作り。戦時中に工兵部隊にいた人が建てたという。

中瀬津の集落は川から離れていて、三〇〇ｍほど山道を歩かなければならなかった。集落から水車小屋に通じる道はかつてはキンマ（木馬）ミチといって木材を運び出すたすソリのために枕木が並べてられた細道だった。一度に七升から一斗の麦や米を運ぶのはお嫁さんの仕事で、重くて大変だったという。

▲現在は舗装道になっている、かつてのキンマミチ。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

阿波國 すきま漫遊記

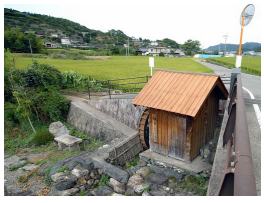
― 関東からの転入者による徳島再発見―
VOL.7 徳島市八多町の水車小屋群

■宝丈の水車小屋
八多川に残る水車小屋で最も上流にある。水輪(みずわ)は鉄製で、水の掛け方は水輪の中央の高さから掛ける「胸掛け」である。
内部には１斗１升、１斗３升の搗き臼があり、９軒の家が共有していたという。９日間は各家が順番に使用し、10 日目はどの家が「踏んでもよい」ルールだったという。「踏む」というのは、水車で精米等をすること。

再建された水車小屋

先月号でまったく観光化されていない水車小屋を紹介したが、実際にそうした水車小屋を見つけるのは容易ではない。そこで今月は、もともと水車小屋があった場所に、町おこし等の理由で再建された水車小屋を紹介しようと思う。そしてこうした生い立ちの水車小屋の観賞ポイントについても詳細に見てゆきたい。

徳島市の八多町には、現在３棟の水車小屋がある。これらの水車小屋はいずれも新しい建築なので、ぱっと見には和風レストランや公園などにあるイミテーションの水車のように見える。



■神子上の水車小屋
「みこがみの臼場」と呼ばれていたという。７軒の家が共有していた。１斗５升の搗き臼１つ。

■庄田の水車小屋
庄田公園の中にある。３水車のうち、唯一内部が一般公開されている。搗き臼×２。

だがこれらの水車小屋はもともとこの場所にあったのを再建した物件なのだ。実際、内部の石臼は旧来のものがそのまま使われている。しかたって、建物の新しさや、故意に民芸風にしつらえたエクステリアに惑わされずに、水車小屋の本質的な要素に着目するならば、十分に実用水車としての評価・観賞が可能な物件なのである。

鉄製の水輪は本気の証し

宝丈の水車小屋の写真を見ると、水輪(みずわ)が鉄製なのがわかる。これをニセモノっぽいと見てはいけない。木造の水輪は腐りやすく定期的に作り替えなければならないし、軸も木であれば軸受けの摩擦も大きく効率が悪い。まったく観光を意識していない水車小屋は、実は鉄製の水輪である場合が多いのだ。

導水路をチェック

八多川のような大きめの川に水車小屋を作る場合、本流に水輪を掛けることはしない。落差が少なくてエネルギーが効率的に利用できないし、夕立や台風などで増水したときに壊れてしまうからだ。水輪に掛ける水量は一定しているのが理想だから、水車は平坦地では用水路に掛けるし、傾斜地では沢から樋で水を引いて掛けることが多い。

水車小屋の建物が新しくなっていても導水路は本来の構造のまま残っていることが多いので、導水路の自然さは実用水車を見極めるときの重要なチェックポイントだと言えるだろう。

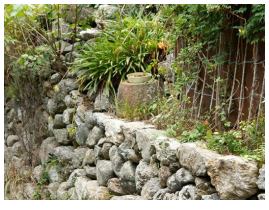
■堰（せき）
神子上の水車の上流にある堰。ここから用水に分水して、落差をかせいでゆく。

■取水部
宝丈の水車の取水部。開閉が可能になっている。水車小屋への水路として極めて自然な形態。

痕跡を見逃すな

先月号では水輪が失われた水車小屋を紹介したが、水輪だけでなく小屋もろとも消滅していることもあるだろう。そういう場合でも、地元古老の話や痕跡からかつての姿を想像することができる。次の写真は宝丈の水車の下流にある堰の様子だ。白線の部分に水車小屋の基礎の石垣が残っている。

かつて八多川には、現存する３棟以外にも多くの水車小屋があった。市内からサイクリングをかねて、水車小屋探索に行くのも面白いかも知れない。



宝丈の水車の上流には「コナヤ(粉屋)」という家があって、水車で製粉業をしていたという。いまその場所には搗き臼が転がっている。

石舟橋の近くの民家では、庭木の整枝のおもりとして、杵の先端につける「先輪」という部品が使われていた。

宝丈水車の内部を見せてもらった。搗き臼と先輪の様子がよくわかる。石製の先輪は八多の水車の特徴だろうか。精巧な細工だ。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

■神山町のカニ捕り名人・相原祥宏さんのカニモジ
仕掛けは夕方に取り付け、朝に回収する。大雨で川が増水したときに特に大漁になるという。

阿波國 すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見 ―
VOL. 8 モクズガニ

徳島の川の秋の風物詩

朝晩の空気が涼しくなり、田のあぜに彼岸花が咲くころ徳島の川ではモクズガニ捕りが盛んになる。モクズガニは甲羅の大きさが一〇センチにもなる川のカニだ。鮎喰川を訪れたとき偶然、カニ捕りをしているという相原祥宏さんという方に出会い、カニ捕りの様子を見せてもらった。

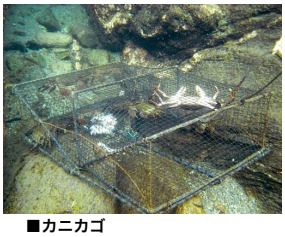
■鮎喰川中流の風景
鮎喰川の中流域は先行河川という地形で、上流部よりも山深く感じる風景が続く。鮎喰川のモクズガニは中流域でよく捕れる。

モクズガニは海で生まれ、生長すると川に遡上して淡水域で大きくなる。数年で親になると、海にくだり産卵して一生を終える。モクズガニが捕れるためには海から中流域までに可動堰やダムがないことも重要であり、川の生態系がしっかりしている証しでもあるのだ。この日訪れた鮎喰川の中流は海から三〇キロメートル以上あるのだから、カニが小さな足でここまで歩いて遡ってくるというのは少し驚く。

カニモジとカニカゴ

モクズガニは鮎喰川では「ケガニ」と呼ばれている。カニを捕まえる仕掛けは「カニモジ」と「カニカゴ」がある。カニモジは、川の一部を仕切って、流れに乗って川を下るカニを集めて捕える仕掛けだ。「カニウケ」と呼ぶ地方もある。もうひとつはカニカゴといって、カゴの中に魚のアラなどを入れて淵に沈めておくワナだ。カゴの入口はカエシになっていて一度入ったカニは出ることはできない。

■カニモジ
祥宏さん自作のカニモジ。川をV字形の「セキ」で仕切って、すぼまったところにカニモジを取り付ける。



■カニカゴ
淵をのぞいてみたらカニカゴが沈めてあった。カニ以外にもウナギ、ナマズ、ギギ、テナガエビなども入ることがある。

■自然の状態のモクズガニ
昼間の鮎喰川で岩の下に隠れているモクズガニを見つけた。水中ではハサミについている毛がふさふさしている様子がよくわかる。

仕掛けを設置する場所は、川の流れ方や周囲の様子を見て決める。カニは夜行性なので、街路灯の下など夜に明るい場所はだめだという。また、その日の水量によって堰(せき)の大きさを調節したり、カニが堰を乗り越えないように樹の枝で堰をカモフラージュしたりするのが祥宏さんのカニモジの作り方だ。

モクズガニは日中は石の下などに隠れていて、日暮れから夜一〇時ごろにかけて活発に動く。ときにはひとつのモジで二〇杯ものカニが捕れるときもあるが、それだけのカニが昼間どこにいるのか、祥宏さんにも不思議なのだという。確かに、川遊びで鮎喰川に潜ってみても、モクズガニはあまり多くは見かけない。鮎喰川を庭にしている祥宏さんのような名人でも、まだカニにはわからないことがあるのだ。

カニをご馳走になる

カニモジを仕掛けたあと、祥宏さんのお宅でカニをご馳走してくれることになった。この日初めて会ったというのにうれしいことだ。私が生まれ育った関東では、伊豆の民宿などでモクズガニが食べられるというのは知っていたが、なかなか庶民の口には入らない珍味と言える。また、有名な上海ガニはモクズガニの近種で、中華食材専門店などの店頭で見かけたが、高級食材だった。

祥宏さんのお宅には、山の水を利用した小さな生け簀があって、そこで捕まえたカニやウナギなどを生かしてある。カニは大きな鍋で四〇分ほど塩ゆでにして食べる。基本的に海のカニと同じ食べ方だ。ゆで立てのモクズガニの身は甘くて、クリームチーズのような濃厚な風味だった。鮎喰川がいつまでも自然豊かで、モクズガニが捕れる川であってほしいものだと願わずにはいられない。

お土産に持たせてくれた特大のカニ。こんな大きなカニが生きられる徳島の川は、つくづくすばらしいところだと思う。

真っ赤に茹で上がったカニ。神山町に住んでいても、一度もモクズガニを食べたことのない人もいるという知られざる食材。

生け簀では新鮮なアジやカボチャなどの清潔な餌を与える。きれいな山水を掛け流しにしないとすぐ死んでしまうという。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

■神山町・相原草臣さん宅の索道
ウインチが瓦葺きの納屋に納まっている。最近補修したそうで以前はもっと太めの主索を使っていたという。形式は複線交走式。中規模ながら見事な索道だ。

阿波國すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見―

VOL. 9 野猿と索道

野猿と索道

東祖谷山に「観光野猿（やえん）」というものがあるのをご存知だろうか？ 谷にケーブルを渡して駕篭を吊り下げたロープウエイのような乗り物だ。河川の下流部で渡し舟が使われるように、山間部の橋のない場所で使われたのが野猿である。残念ながら生活で使われている野猿は県内には現存しない。おそらく全国にも残っていないであろう。そこで今月は現代に残る野猿とも言える「索道（さくどう）」を紹介しようと思う。

索道は林業の木材の搬出などに使う運搬装置だ。県内では傾斜地の農地から作物を搬出したり、山腹の人家に生活物資を運び上げたりするためにも使われている。今回は索道の中でも特に川を渡る目的で設置された物件に着目してみた。

トバシ

一般に索道は主索というケーブルにカゴをつり下げ、曳索という細いケーブルでカゴを引き動かす。しかし、より原始的な索道には、傾斜のついた主索一本しかなく、滑車に直接荷物を吊り下げて自重で滑り降ろす「トバシ」というタイプがあった。当然、荷物は一方通行。荷解き場で取り外した滑車は荷積み場まで人が運び上げた。トバシは構造が単純なので、荷物が途中でケーブルから脱線することも多かったという。

■トバシに使われる滑車
「チリキ」とも呼ばれる滑車。切れ込みがありケーブルから外せるようになっている。これは小型のもの。

■鮎喰川のトバシ
中央を左右に横切っているケーブルがそれ。カゴやウインチ等の設備がないのでトバシを発見するのは容易ではない。

複線往復式

一般的な索道は主索と曳索の二本のケーブルで荷物を運ぶ。二種類のケーブルを用いることを「複線」と言う。一台のカゴを往復させる複線往復式の索道は、個人の生活物資を運ぶような、反復回数の少ない場所で使われている。

■上勝町で見かけた往復式索道
曳索をけん引するウインチが見当たらなかった。人力でけん引しているのだろうか。

■吉野川市で見かけた往復式索道
索道は重機が入れないような場所に作ることが多い。人力だけで設営する技術も継承がむずかしくなってきている。

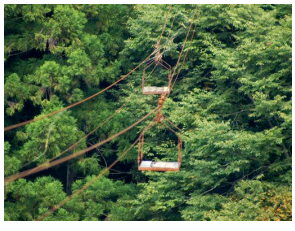
■吉野川市で見かけた往復式索道
支柱も大掛かりで主索も太い雄大な索道。索道で 200kg 以上の荷物を運ぶには林業架線作業主任者の資格が必要。

複線交走式

索道を使うには両端で荷受けと荷積みをしなければならないから、たくさんの荷物を移送するには二台のカゴを交互に動かしたほうが時間の節約になる。観光地のロープウエイはみなこの形式だ。これを交走式という。畑から農作物を出荷するような場所では交走式の索道が使われる。

■神山町・小川博行さん
索道を実際に動かしてみせてくれた。２年前に家まで車道が開通し、索道を動かすのは久しぶりという。

■交走式のケーブル
黒っぽい太いケーブルが主索で固定されている。茶色の細いケーブルが曳索。曳索は循環式になっている。



■交走式索道の運行
対岸は遠くて声は届かないので、荷積みが終わったらケーブルを叩いてウインチ側に合図を送っていた。

索道は本来は荷物専用であり、人間が乗ってはいけないことになっている。しかし夕立や台風で川が増水して渡れないときは、カゴに乗って川を渡ることもあったという。

人間の交通手段としての野猿はもはや観光地でしか見ることができない。いま残っている荷物用の索道も、道路の整備と山間部の過疎化のために遠からず消えてゆく運命だろう。それは生活が便利になることだから否定はできないが、徳島らしい風景がまたひとつ消えるのだと思うと淋しくもある。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

■板野町
おそらく県内で最も大きな煙出し櫓ではないかと思う。『カマヤ（台所）』の屋根を含めると四層の楼閣のように見える。ちなみに『カマヤ』が家の正面から見て右側にある『右勝手』という間取りは、今回紹介する物件のなかではこの家だけだ。

阿波國 すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見―

VOL.10 煙出し櫓（けむだしやぐら）

煙出し櫓

「うだつの町並みを歩く」といったタイトルのブログや観光ガイドは数えきれないくらいあるし、そのほとんどが『うだつ』について訳知りげに解説している。しかし同じ屋根飾りでも『煙出し櫓(けむだしやぐら)』について書いた文章がほとんど存在しないのはどうしたことなのだろうか。今月は徳島の煙出し櫓の魅力を紹介しようと思う。

『煙出し』とはカマドや囲炉裏の煙を抜くために屋根に作る換気口のことだ。その煙出しを裕福な家では櫓状にしつらえる。商家が富の象徴として『うだつ』をあげたのと同じように、農家にとってのステータスシンボルが煙出し櫓なのだ。北陸地方では煙出し櫓のことを『うだつ櫓』とも呼ぶくらいだから、これはまさに富の象徴なのである。

探してみよう

立派な煙出し櫓は県内では主に藍農家の『カマヤ(台所)』の屋根に見られる。今回紹介する物件はいずれも母屋からカマヤが母屋から張り出した間取りでだった。カマヤは家の裏手になるし、煙出しは母屋の大棟より低いので、家を裏側から見なければ発見できない。北側から写真を撮ることになるから逆光になりやすいのは困ったことだ。

▲吉野川市川島町
北側が道だと近くから観察できる場合もある。ここはわかりやすい場所なので、気付いている人も多いのではないか。

▲吉野川市山川町
高越山系を背景にした美しい田園の風景。遠目にはまるで城の天守閣があるように見える。

▲阿波市阿波町
全体的に黒塗りで、城にたとえるなら松本城といったところか。周囲を藍寝床で囲まれているので遠くからしか見られない。

▲吉野川市川島町
二層部分が朱に塗られているのが個性的。屋根の先でカールしているのは、蕨手型の『鳥衾(とりぶすま)』。鳥衾は県西の煙出し櫓に多く見られる。

煙出し櫓のある家を見ていくと明治以後の瓦葺きの農家が多いことがわかる。徳島の江戸期の裕福な農家の典型的様式は、寄棟の草葺き屋根に本瓦葺きの庇を巡らした『四方蓋造り』である。四方蓋造りでは大棟に煙出しがなく、気抜きが必要となるカマヤは瓦葺きの庇部分に配置されていた。江戸自時代には農家が屋根全体を瓦葺きにすることは禁止されていたので、裕福な農家は庇屋根の部分の瓦葺きに贅をこらしたのだろう。そして明治になり、総瓦葺きの二階建てを自由に建てられるようになっても、相変わらずカマヤの屋根の装飾を競ったのが徳島の煙出し櫓の成り立ちなのではないか、などと想像をたくましくしてみる。

うだつ櫓の町並みを歩く

立派な煙出し櫓が比較的集中しているのはうだつで有名な美馬市脇町だ。ここはひとつ「うだつの町並みを歩く」ではなく「うだつ櫓の町並みを歩く」というテーマで散策をしてみてはどうだろう。ここで紹介するのは、二層以上の煙出し櫓だが、一層の煙出しにも立派なものもある。“煙出し櫓観賞”はほとんど未開拓のジャンルだからきっと新しい発見があると思う。

◀正面から見るとシンメトリーな構成がユーモラスだ。

▲脇町北庄地区には多くの煙出し櫓が残っている。

▲煙出しの小屋根の棟の向きが、カマヤの棟と直交している珍しい付き方だ。

▲新築住宅でも煙出し櫓を上げている家があった。しかも銅板葺き。

▶こんな狭い路地の奥にも人知れず煙出し櫓があったりする。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

阿波國 すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見―
VOL.11 石風呂

■石井町・利包の石風呂

石風呂は右の小屋の中に保存されている。奈良時代の僧行基が石井を訪れたときに作り方を教えたという伝説がある。寺は現在は無住だが、石風呂は代々の庵主が管理運営してきたという。小屋と庵のあいだの戸の先には井戸が残っている。入浴客はそこで風呂で火照った体を冷やしたり、煤の汚れを落としたりした。

石風呂とは

『石風呂』とは、焚き火で加熱した石室（いしむろ）に入って熱気を浴びるいまで言うサウナである。「風呂」という言葉は「室」から転じたとも言われており、石風呂は風呂の古い様式なのだ。他県では現在でも入浴できる石風呂があるが、残念ながら県内の石風呂はすべて遺構だ。今回は県内に残る石風呂を訪ねてみたいと思う。

石井町・利包の石風呂

前山のふもと、薬師庵という寺の境内にある。昭和四五年ごろまで営業していたといい、実際に風呂に入ったという人の話しを聞くことができる。利包の石風呂では、風呂を焚くときには松葉を使い、ひと抱えもある松の枝の束を二〇回ほどくべたという。十分に加熱できたら残り火を掻き出し、こもを敷き、海水を打って内部を蒸し風呂状態にしたという。このように海水や海藻、薬草を使って加湿するタイプの石風呂を「藻風呂」とも言う。

▲利包の石風呂外観

元々はもっと簡素な屋根が掛けられていたか、あるいは露天だったろう。炭焼き窯と似ているが、一般的な炭焼き窯は天井が土でできているのに対して、石風呂は天井が石になっているので区別できる。

▲利包の石風呂内部

一度に５～６人が入れた。入るときは綿入れを着て、頭には防空ずきんのようなものをかぶり、手袋、足袋を付けたという。壁に触れると火傷をするからだ。ずきんなどは入浴者が持参したそうだ。

徳島市大原町・籠の藻風呂

論田町のスーパー銭湯えびすの湯のエントランスにこの史跡の説明が書かれているので名前を知っている人も多いだろう。江戸時代、勝浦川河口に『籠の御茶屋』という蜂須賀家の別荘があり、そこに『籠の藻風呂』と呼ばれた有名な石風呂があった。かつては大名も石風呂を楽しんだのだ。

▲籠の御茶屋跡

籠の御茶屋は維新後は民間に払い下げられ湯治場として営業した。阪神方面からも客が訪れたという。昭和 15 年あるいは 19 年まで営業していたというが、いまは竹林になっている。

▲籠の藻風呂

籠の藻風呂の痕跡はいまでもはっきりと確認できる。実は徳島市内には 10 ヶ所以上の藻風呂があったという文献もあるのだが、私が痕跡を確認できたのはここだけだ。

吉野川市川島町桑村の石風呂

長楽寺という寺の門前を過ぎ、東へ三〇〇ｍほどいった道ばたにある。このあたりの字は風呂谷という。県内で風呂谷とか石風呂という地名は、たいていむかし石風呂があった場所だ。

▲桑村の石風呂外観

もとは右に見える道のあたりにあったのを道の拡幅で移動したという。風呂の前の板碑は天明三年の銘があり、弘法大師が一夜で建立したものであるといういわれが書かれている。

▲桑村の石風呂内部

桑村の石風呂は、一見すると古墳を再利用しているようにも見える。だが内部に入ってみると、平面がほぼ円形になっているので、これは初めから石風呂として作られたものだろうと思う。

小松島市櫛淵町の石風呂

櫛淵八幡神社の南東六〇〇ｍ、羽ノ浦山系の北面に二万五千分の一の地形図ではわからない小さな貯水池があり、その奥の竹林の中にある。

石風呂を構造的に分類すると、平地に土盛りをして作るカマドタイプと、崖を掘った洞窟タイプの二種類に分けられるのだが、櫛淵の石風呂は洞窟タイプだ。

▲櫛淵の石風呂外観

非常にわかりにくい場所にあるうえ、たどり着くには薮コギが必要。ここには２つの石風呂があったといい、少し斜面を登ったところに跡らしきものがある。

▲櫛淵の石風呂内部

天井は大きな一枚岩になっている。近くにある溜め池の藻を敷いたともいう。戦前くらいまでは近所の人たちが使っていたという。いまはコウモリの巣になっていた。

神山町阿野代次の石風呂

梅の里の一角にあり、看板も立っているので比較的見つけやすい。

江戸時代に徳島藩の姫が女性の下の病を治すため、この地に逗留したという伝説がある。石風呂のおかげで病気は治癒し、姫が逗留した家はほうびとして年貢を免除された。代次には多田姓が多いが、これは年貢をタダにしたからなのだという。

▲代次の石風呂外観

山の斜面にある。洞窟タイプとカマドタイプの折衷型。すぐ近くには湧き水の水場があるので、汗を流すこともできただろう。右手には祠や石仏が祭られていて、神聖な場所である。

▲代次の石風呂内部

内部は円形なので、古墳ではないだろう。古い石風呂で、使い方などを覚えている人はいないようだ。煤けているのは、近年になって試しに火を焚いたからだが、うまく入浴できなかったらしい。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

■那賀町・舞ヶ谷の猪垣

那賀町で偶然見つけた猪垣。埋もれて低くなってしまっているが、もともとは1mくらいはあったはずだ。イノシシは脚が短いので障害物を乗り越えられず、壁があると壁に沿って移動するという。たぶん、あと何十年かしたら、ここに猪垣があったということはわからなくなってしまうだろう。

阿波國すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見―
VOL.12 猪垣

猪垣とは

『猪垣(ししがき)』とは、山あいの田畑をイノシシから守るための塀のことである。現代でも山の畑では電気柵やトタン板で害獣の侵入を防ぐ工夫をしているが、一般的に猪垣と言ったら、土塀あるいは石積みの塀を指す。徳島では『猪壁(ししかべ)』とも言う。

峯八の猪垣

吉野川市川島町の峯八集落には、村の畑を囲むような長大な猪垣があったという。村内の鎮守の境内に猪垣の碑があり、藩主から年貢減免の援助を受けて文化四年に猪垣が築かれたという内容が書かれている。歴史がわかる数少ない猪垣である。

▲峯八の猪垣

大正時代には 1km 以上残っていたという石垣は造成工事などで大半が失われたが、いまでも 200m くらい残っている。比較的大きな石で荒っぽく積んであるのが特徴か。すでに半分以上が土に埋もれてしまっている。

▲峯八の猪穴(ししあな)

猪垣を見学するときは、一緒に『猪穴』というものを探してみよう。猪穴は、猪垣の切れ目などに作られた落とし穴だ。現在の法律では落とし穴による猟は禁止されているので、これらは猪垣と同じ時代の古い遺構なのだ。

神宅の猪垣

上板町の大山寺の登山口、神宅にも立派な猪垣が残っている。猪垣がある谷の奥には「猪野谷滝」という名前の滝があることから、昔からイノシシが多かったのかも知れない。

▲神宅の猪垣

比較的よい状態で残っている。石積みがしっかりしているからだろう。この場所にはかつて原士(はらし)の屋敷があったという。原士というのは、阿波藩時代の半農の武士のことだ。

▲神宅の猪穴

ここにも猪穴といわれている穴がある。案内してくれた吉本彦一さんは狩猟の経験もある人だが、実際にこの穴でイノシシが捕れたかどうかは半信半疑のようだった。

美郷の猪垣

吉野川市美郷の猪井さんというお宅の畑に半現役の猪垣がある。猪井という名字はこの猪垣と関係があるのだろうか。猪垣のいわれを訊いてみたが、猪垣がいつごろの先祖によって作られたかはわからないという。

▲美郷の猪垣

猪垣の外部との出入口。本来はここに板戸があって、普段は閉じられている。個人の敷地にあるので保存状態もよい。市指定文化財にしてもよい物件だと思う。

▲美郷の猪穴

教科書通りに出入口のすぐそばに猪穴があった。壁面も石積みになっていて、他県で見た猪穴とほぼ同様の構造。猪井さんによれば、猪穴ではないというが。

▲柵の取り付け穴

壁面には数mおきに穴の空いた石が飛び出している。ここに竹を挿して柵にすることで、猪垣をさらに高くしてシカも防いだのだという。

剪宇の猪垣

猪垣は構造から三種類に分類できる。ここまでに紹介したのはいずれも石積み型。その他に土塀型と、石柱型ある。土塀型は穴吹にあったが町営住宅建設で失われてしまった。石柱型は、板碑に使うような変成岩を地面に立てて並べたものだ。つるぎ町の剪宇集落では石柱型の猪垣が見られる。

猪垣を探してみよう

徳島の猪垣は他県のように観光化されていないし、ネットで検索してみてもほとんど情報はない。だが根気よく探せばかなりの数があるのではないかと思っている。探すときのポイントは、村外れの若い植林地や、沢ぞい棚田の行き止まりに行ってみることだ。そこはかつて多大な努力で開拓され、そしていま見捨てられ山に還ろうとしている田畑の跡である。そこで猪垣を目の当たりにすると、いまとは違った山村の風景が見えてくると思う。

▲剪宇の石柱型猪垣

大きな一枚岩を石碑のように地面に突き刺して並べて作られた猪垣。とても珍しいものだと思う。全国の猪垣ファン垂涎の物件といえるだろう。

▲剪宇の猪垣

剪宇集落全体を囲むように作られた猪垣で、県下では最大規模の遺構。埋没も進んでいて、いまや猪垣の頭頂部がわずかに見えるだけになっている。

▲神山町広石の猪垣

猪垣は休耕田や山林にあるので、車道から見つけるのはむずかしい。地元の人でも知らない場合が多いので、場所を尋ねるときは昔のことをよく知っている古老を探そう。

▲ぬた場

里山を歩くと泥を練った跡に出くわすことがある。これはイノシシが泥浴びをする場所で『ぬた場』という。ひづめの跡もたくさんついている。

▲泥をこすった跡

ぬた場の近くを探すと、イノシシが泥浴びをしたあとに、泥をぬぐう木を見つけることもできる。泥と一緒にダニなどを落とすと言われている。

深草　縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

阿波國 すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見 ―
VOL.13 下浦の釈迦堂

釈迦堂

毎年、桜の季節になると思い出す仏像がある。石井町浦庄の釈迦堂に安置されている釈迦如来座像だ。釈迦堂は、旧伊予街道に面した目立たないお堂で、現在は町内の集会所として使われているため、ぱっと見にはお寺には見えない。この集会所内に大仏があることは、石井町民でもあまり知らないのではないだろうか。

国道 192 号線を走ると、所々で伊予街道の旧道へと入るY字路に出会う。私はこんな道を見ると、つい旧道に入ってしまう。名所旧跡などはたいていは街道に沿って点在しているからだ。旧道走行はすきま観光の基本と言えるだろう。

私が初めて釈迦堂を訪れたのは桜が満開の季節だった。釈迦堂の前は道が特に狭くなっていて、車の運転に集中しなければならない場所だ。満開の桜がなければここにお堂があることに気付かなかっただろう。

釈迦堂には山門や墓地もなく、見た目は寺らしくない。住職もいないため普段はカギがかかっていて、大仏はサッシュ越しに見るだけだ。4月上旬の日曜日に近所の人々が花見会をするので、そのときだけ境内が華やかに飾られる。

浦庄大仏

「大仏」とは、実際の仏陀の体のサイズよりも大きく作られている仏像のことをいう。仏陀は超人的な存在で、身長は四・八mあったとされている。したがって、立ち姿の仏像の場合は四・八mを超えれば大仏ということになる。座った仏像の場合は、半分が基準となっていて二・四mが境界線だ。釈迦堂の釈迦如来座像は全高がちょうど二・四mなので大仏に分類できるのである。「浦庄大仏」と呼んでもいいかもしれない。

石井町指定文化財の案内板を見ると、頭部のみが鎌倉時代、体は室町時代、腕は江戸時代の修復だという。

この大仏の特徴は何といっても、集会所の中にあるということにつきる。県内には徳島市の丈六寺をはじめ、立派な大仏がいくつかある。それらの寺では大仏は人を導く威厳に満ちた存在だ。ところが浦庄大仏は、少しも威厳ぶったところがない。顔立ちは大きさのわりにぼんやりしていて、まどろむような曖昧な表情を浮かべている。この不思議な大仏の誕生には次のような言い伝えがある。

全体的に塗りが剥げていたり、衣紋の表現などもいかにも後世の作りで、仏像としてのキレはない。だがこの大仏の良さは、キレではなくて身近さではないだろうか。お寺を出て、人々の暮らしの中に下った仏さま、そんな存在だ。

建物の内部はほとんどの部分が集会所の機能なのだが、中央の１間だけが仏間になっていて、大仏はそこに窮屈そうに納まっている。
集会室にはカラオケセットも見える。大仏の横でカラオケを歌える場所は全国でもここだけかも。

伝説

その昔、いまの釈迦堂の南側に薬師寺という大きなお寺があり、浦庄大仏はその本尊だったというのだ。その仏像を作ったのは奈良時代の名僧、行基だった。行基が国分寺を建てる場所を探して全国を行脚したとき、浦庄に立ち寄って本尊を彫ったのだという。薬師寺はその後、何百年が経ってすたれていたが、鎌倉時代に再び復興して堂塔が整った。

そして世は戦国乱の時代となり、土佐の長宗我部元親が阿波に攻め入る。吉野川の流域では激しい戦いが繰り広げられた。多くの寺が焼き打ちされ、薬師寺も例外ではなかった。本堂に火の手が廻ったとき、僧たちはせめて本尊だけでも守ろうと、寺の裏手の淵に本尊を投げ込んだ。

長宗我部の軍勢が去ったあと、村人たちは淵から大仏を出そうとしたが、寺の裏は斜面が急だったため、対岸に引き上げざるをえなかった。そしてそのまま伊予街道に面した場所にお堂を建てて安置することになった。

ところがこの大仏は霊験が強すぎたために、街道を通る人々に困った問題が起きるようになった。大仏が不浄を嫌ったため、魚屋が生魚を担いでお堂の前を通ると転ばされたり、農家が大八車に肥桶を載せて通るとひっくり返されたりするのだった。また、侍が馬に乗ったまま通ると、落馬するというありさまだった。いくらありがたい大仏でも、これでは街道を安心して通れない。仕方なく偉いお坊さんに頼んで、大仏から魂を抜いてもらった。そのせいで大仏は庵主の一人も養えないようになり、いまのように落ちぶれてしまったのだという。

たまたま訪れたときに堂が開いていて、上がらせてもらった。堂内には昔の百万遍念仏の大数珠が残っていて、昔の様子を再現してくれた。このあたりでは百万遍は小学生の行事で、一人が中に入ってカネを叩き、残りの子は周りで大数珠を回した。

釈迦堂の南を流れる曲突谷川。大仏を投げ込んだ淵があったというあたりの様子。左側の斜面の上が昔の寺があった場所。今の釈迦堂は右側になる。今は三面コンクリートの排水路だが、昔は子供が泳いだり、ウナギを捕ったりできる川だったそうだ。

釈迦堂から南へ行く道は光明小路と呼ばれる古道だ。
浦庄小学校の横の灌頂橋では昔タヌキが人を化かしたという。葬送行列がここを通ると、担いだお棺が急に軽くなるといわれ、絶対に通らなかった。今では想像もできない。

かつて薬師寺の伽藍があったとされるあたりには大銀杏があり往時をしのばせる。
長宗我部氏は多くの寺を焼いたので浦庄では良くは言わない。阿波の者が土佐の菩提寺に行くと墓に小便をかけるため、長宗我部氏の墓には柵があるのだなどともいう。

深草　縁夫　関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

■上板町
「これがお墓？ お地蔵さんじゃないの?」と思うなかれ。江戸時代以前の墓はこのような光背を負った仏像型が多かった。このような墓石を「舟型」という。近代では子供の墓に用いられる形式なので、形だけで即年代判定はできないが、このような石造物は、仏像ではなく墓石だということは覚えておこう。

阿波國 すきま漫遊記

― 関東からの転入者による徳島再発見 ―
VOL.14 田んぼの中の墓

田んぼの中の墓

「きょうは天気もいいし、国府あたりに田んぼウォッチングでも行くか!!」というのが4月下旬ごろの私の休日の過ごし方だ。4月下旬には県北地方で水田に水を張り田植え直後までは、水田が一番美しく映える季節で、田んぼ観賞には最適だ。さて、徳島の田んぼを見て不思議に思うのは、田んぼの中にお墓が多いことである。お寺や霊園以外の場所、つまり家の裏や田畑に墓地をに作られた墓は「屋敷墓」といって全国的にあり、珍しくはない風習だ。だが水田のど真ん中に墓石があるというのは、他県ではあまり見かけないように思う。

▲阿波市阿波町
このような頭頂部が平たいピラミッド状になった墓石を「山角型」という。この形式は明治時代以降の墓だ。なお、墓地にある墓で頭頂部が鋭利な四角錐になっているのは、軍人の墓である。

▲徳島市国府町
このような頭頂部がかまぼこ型になった墓石を「櫛型」という。江戸時代中期に出現た形式で、江戸時代の墓の主流の形式だ。稲刈り時にコンバインが衝突しないよう目印が立ててある。

▲上板町
このような五角形の墓石を「駒型」という。板碑が変化したと考えられていて、江戸時代の前半に流行した形だ。風もなく鏡のように静かな水面に映る姿が清々しい。

誰の墓なのか?

田んぼの中の墓にまつられているのは誰なのだろう。いろいろ聞いてみてもはっきりとはわからない場合が多い。書物によればこれらは「地主さん」「忌串さん」などと呼ばれる。墓が田畑の中にある理由としては一般に次のように説明される。①元は屋敷だった場所が、家が絶えたりして耕地に変わった。②他人がその田畑を欲しがらないようにわざと墓を建てる。子孫が田畑を手放さないようにするためである。③その土地を開墾した人を功労して畑の中に埋葬する。④長男が家を相続する前に死んだとき、親がその子に田畑を継がせるという気持ちから田畑の中央に墓を作る、というケースがあるらしい。現代人にとっては①は理解しやすいし、実際にそう思える墓所もある。しかし先に紹介したような「一つ墓」は①ではないだろう。屋敷墓であれば歴代の墓石が並んでいるケースが多いからだ。

▲石井町
田んぼを見ているというより、何か別のファンタジックな光景を見ているようだ。墓石はかさ上げされた基壇の上に建っている。これは、元屋敷だった場所が耕地に変わった例ではないだろうか。

▲徳島市矢三
矢三は田んぼの中の墓が多い土地だが、この物件には墓石がない。座布団くらいの大きさしかなく、鍬のひと振りで崩れてしまいそうだ。代々これを避けて耕作してきたというのはすごいことだと思う。

▲上板町
シルエットがまるで南方仏教の寺院のようだ。五輪塔は鎌倉から室町時代の主要な墓石の形式だが、これは古いものではない。徳島では五輪塔は武士の墓だとされている。

▲徳島市入田
五輪塔や宝篋印塔がある島状の墓所。このように田んぼの中にある島を「タシマ」と呼ぶそうだ。この島には秋には彼岸花が咲き乱れる。県内で最も美しいタシマだ。

田んぼの中の墓は、北島、藍住、上板、石井、徳島市矢三、国府あたりに特に目立つ。なぜなのかはわからない。耕作をするには邪魔になるが、かといって他に移して悪いことでもあるとイヤだという信心深さが理由のひとつとしてあるようだ。現代は人の良心よりも効率が優先される時代であり、食品の偽装事件などは当然起こるべくして起こったといえるだろう。ここで紹介した田んぼでは、効率が悪くても神さまや先祖を大切にする気持ちを忘れずに耕作が続けられている。日本人全体がそのくらいの余裕を持って生きられればよいのにと思わずにはいられない。

▲北島町
田んぼの中にあるのは古い墓ばかりではない。比較的新しい墓石が並んでいる墓所もある。これでは田んぼから水が引くまでは、墓参りもままならない。

▲徳島市国府町
石塔の自重で地中にめり込んでしまっているのだろうか。耕作していったん畑になった土地にあとから墓が作られた例ではないかと思う。

▲石井町
田んぼの中にあるのは墓だけではない。数は多くないが、お宮もいくつか見られる。元々は屋敷神だったものなのだろうか。田んぼの中のお宮は県西の方面に多いような気がする。

▲石井町
これはもはやタシマではなく「軍艦島」と呼びたい。宝篋印塔が艦橋のように見え、シルエットがまるで戦艦だ。軍艦のように見えるタシマは他にも数ヶ所あるが、この物件が最高にカッコよい。

▲阿波市阿波町
県西では田んぼの中の墓の密度は小さくなるが、この物件は撫養街道から南側に見えるので見つけやすい。堂々たる有像船型石塔だ。石塔を避けて苦労して稲が植えてある。

深草　縁夫
関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。 ■日本すきま漫遊記　http://www.sukima.com

■徳島市・福島団地のタコの山

福島団地内の公園にあるタコの山。
最近塗り直されたようで、落書きなどもなくきれいな状態。各部分の造りはタコの山の標準的なデザインでまとめられており、手堅いモデルといえるだろう。

阿波國すきま漫遊記

VOL.16 タコの山

［取材・文・写真］ 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

タコの山とは

公園の遊具で最も人気が高いのは滑り台ではないかと思う。その中でも『タコの山』と呼ばれる複合滑り台は、形のユーモラスさ、滑りの多様さで特に愛されている滑り台だ。子供のころに滑ったことがあるという人も多いのではないだろうか。

この滑り台を作ったのは、前田環境美術㈱という遊具メーカーである。タコ型の滑り台は全国に２００個所程度あると言われており、徳島県内には７つのタコが確認できる。四国全体をみると、愛媛県に３個所、高知県に３個所、香川県には今のところ見つかっていないので、徳島は四国のタコ王国と言ってもいいだろう。

タコの山の魅力

タコの山の魅力は第一に滑って楽しいということだ。特にタコの背中側から前側向けてに螺旋を描くように作られた滑走部は、他の滑り台ではなかなか味わえないスリルがある。タコの山の滑走部の表面は『人造石研ぎ出し仕上げ』、通称『人研ぎ（じんとぎ）』と呼ばれる仕上げである。人研ぎは、左官職人、研ぎ職人が手間をかけて仕上げるもので、最近の滑り台ではほとんど見かけなくなっているが、摩擦が少なくスピードも出るので、楽しい滑り台が多い。

▲ タコの山の内部

頭部の中の様子。通路や滑走部が複雑に分岐している。単に滑るという目的以上に、空間の体験としても面白い。

タコの山のもう一つの魅力は、その形状の多様性と手作り感だ。工場で作ったユニットを組み立てるだけの滑り台と違って、タコの山は発注者の意見を取り入れたりしながら、一点一点鉄筋職人が形を作り上げてゆく。私はこれまでに３０個所以上のタコの山を見てきたが、すべて少しづつ違っている。

▲ 徳島市・津田公園にある石の山

タコの山の原形となった作品を津田で見ることができる。ただし、いくつかの形状的な特徴から、タコの山が発売された以後に作られた石の山だと思われる。

タコの山の歴史

前田環境美術によれば、タコの山の誕生は偶然だったという。タコの山以前には「石の山」という商品があった。この遊具を見たある人が、「頭を載せたらタコになる」と言い、それを聞いたデザイナーが実際に頭を付けたのだそうだ。

前田環境美術は東京芸大出身の若手彫刻家たちが中心となって創業した会社で、動物の形の遊具や抽象彫刻のような造形を重視した遊具を作ることが特徴だ。機能一辺倒の遊具ではなく、時に芸術的であったり、時に感情移入の対象であったりすることで、子供たちの記憶に強く残る遊具を造り出している。

それを証明するこんなエピソードがある。東京の北区で、道路整備のために公園のタコの山をどけなければならなくなった。新しい敷地に新品のタコの山を作り直すこともできたのに、住民達は思い出のつまったタコの山をそのまま移設することを希望したのだという。一般的な遊具では考えられないことだ。

▲ 松茂町・松茂中央公園のタコの山

明るいサーモンピンクで塗られている。エッジの仕上げが全体的にシャープ。私が「襟」と呼んでいる中央の八の字の部分が、女性の脚みたいで、グラマーな印象のタコだ。

▲ 徳島市・応神公園のタコの山

頭の傾きが大きいのが特徴。頭を傾けているタコは、必ずこの方向に傾けている。逆に傾いている物件は全国でこれまで1個所でしか見つかっていないという。

▲阿南市・中浦緑地のタコの山

頭の両側に、私が「耳」と呼んでいる小さなひさしがあるのが特徴。全国的にみると、ひさしのないタイプが多く、ひさしは徳島のタコの山の特徴である。

さまざまなタコたち

県内のさまざまなタコ滑り台を紹介しよう。いずれも、前田環境美術の作品である。

▲ 徳島市・みなと公園のタコの山

『タコのすべり台』という作品。他のタコに比べるとやや幾何学的。脚の下に入ると、大ダコに飲み込まれるような迫力がある。

▲ 徳島市・椎宮神社こども公園のタコの山

『タコの山B』という作品。前方に2本、後方に3本の滑走部があり、見た目よりは複座な滑り台。このように頭の上に登って遊ぶこともできるようだ。

▲ 三好市・箸蔵公園

『抽象形態すべり台』という作品。前面に2本、背面に1本の滑走部があり、登るための階段がない不思議な滑り台。上部の三角形の形から「イカの滑り台」と呼ばれることがある。

■羅怙羅(らごら)尊者

羅漢ファンあいだで特に人気の高い羅怙羅尊者。お釈迦様が出家する前に生まれた実子といわれている。自分の胎内には仏が宿っているということを示すため、素手で腹を開いて見せたという場面を再現している。羅漢はいわゆる超能力者なのだ。

阿波國 すきま漫遊記

VOL.17 地蔵寺・五百羅漢堂

［取材・文・写真］ 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

巡礼堂

私はお寺や神社を見るのが好きで、はっきりと数えたことはないがこれまでに2千箇所くらいのお寺を訪れていると思う。お寺には修行の場として厳粛なお寺もあるし、楽しみながら仏教に触れあえるようなお寺もある。後者の「楽しみながら」というのにはいくつかのパターンがあって、その一つに建物内部が迷路状になっている寺というのがある。その究極の形態は、関東から東北にかけて分布する『さざえ堂』という形式の建物で、3階建ての建物の内部が通路と多くの階段で仕切ってあり、順路に沿って仏像を拝観していくと、一度も同じ場所を通らずに建物内すべてを巡れるという不思議な建物だ。さざえ堂のように、人が堂内で移動しながら仏像を拝む仕組みの建物を『巡礼堂』という。

巡礼堂には大別して2つの系統がある。一つはさざえ堂で、内部には百観音が納められている。もう一つが、今回紹介する五百羅漢堂である。いずれも発祥の地は、江戸の本所にあった『羅漢寺』で、この境内にさざえ堂と五百羅漢堂が両方建っていたのである。現在、全国に残る巡礼堂は、本所羅漢寺を模して作られたものだと考えられる。

現存する巡礼堂の分布をみると、さざえ堂の分布は関東以北に限られている。一方の五百羅漢堂は関東から西に分布しのみている。五百羅漢堂が西にしかないのは偶然なのか、なにか理由があるのかはわかっていない。関東では巡礼というと観音霊場巡りが盛んなので、さざえ堂が関東以北に作られるのは理解しやすいが、関西では羅漢信仰が盛んかというとそうとも思えないからである。

前置きが長くなってしまったが、今回紹介する地蔵寺・五百羅漢堂について、仏教建築史上で特別な位置づけにある建物だということをまず知っておいてほしかったのである。

地蔵寺・五百羅漢堂

地蔵寺は四国霊場の5番札所の寺で、五百羅漢堂はその奥の院にあたる。本堂から少し離れているため、五百羅漢堂のほうまで行かないお遍路さんも多い。五百羅漢をまつるのは、黄檗宗(禅宗)のしきたりだということもお遍路の対象にならない理由かもしれない。

現在の五百羅漢堂は大正4年の再建で、その以前の堂は安永4年の築だったという。江戸に五百羅漢堂が建てられてから50年後にできたことになる。古絵図などをみると、建物の規模や構造は現在と同じだったようだ。

羅漢

羅漢とはお釈迦さまの直接の弟子たちのことである。如来や菩薩のようないわゆる仏さまではなく、悟りを開いたとはいえ人間なのだ。それゆえ、たいていは親しみやすい造形をしている。五百羅漢をまつっている所では、探すと肉親に似た像が見つかると言い伝えられているのはそのためだろう。また巡礼堂に限らず、五百羅漢をまつる寺は面白い寺である傾向が強い。覚えておくと旅が楽しくなるかもしれない。

▲ 通路が曲がっているところ

羅漢堂の内部の通路は " コの字 " 型になっている。順路は途中で2箇所折れ曲がっていて、進行方向が見通せないようになっているのだ。これぞ、巡礼堂の真骨頂。

▲ 巡礼路の様子

巡礼路は暗い。羅漢は片側のひな壇に並んでいる。提灯の明かりに浮かび上る像は少し不気味だ。子供のころここが怖かったと言う人も多い。

▲巡礼路への入口

弥勒堂の中に五百羅漢の巡礼路への入口がぽっかりと口をあけている。これまで巡礼堂をいくつも見てきたが、入口の前に立つときはワクワクする。

▲ ミニ八十八箇所

大師堂の弘法大師の廻りの通路では、四国八十八箇所のミニ巡礼ができるようになっている。この通路の感じ、巡礼堂マニアにはたまらない構図だ。

▲ 大師堂

巡礼路の最後には弘法大師をまつる大師堂に出る。入口のあった弥勒堂からは180度回転した位置になる。大師堂の内部にも別の通路がある。

▲ 釈迦如来三尊仏

全行程の中間のところに大仏殿があり、釈迦如来がまつられている。釈迦の左右には文殊菩薩、普賢菩薩の脇侍も置かれている。この飾り方を釈迦三尊仏という。

▲ 個性的な造形

「ウチの近所にこういうオヤジいるよw」などと思ってしまう人間くさい造形。仏像の観賞というと専門知識がいる場合が多いが、羅漢観賞は気軽に楽しもう。

■秋田稚蚕飼育所の掃き立て

蚕の1齢~3齢幼虫までを「稚蚕(ちさん)」と呼ぶ。稚蚕はウイルスなどの病菌に感染しやすく、病気に感染すると繭づくりの時期になって発症して作柄に大きな被害がでる。このため稚蚕飼育は一般の農家は行なわずに農協や専門の施設で行われるのが普通だ。稚蚕飼育の時期に作業者は麹や納豆などは扱うことができないほどデリケートなのだ。
これは卵からかえった幼虫にはじめて桑葉を与えているところ。この作業を「掃き立て」という。

阿波国すきま漫遊記

VOL.18 養蚕 （前編：催青～配蚕）

［取材・文・写真］ 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

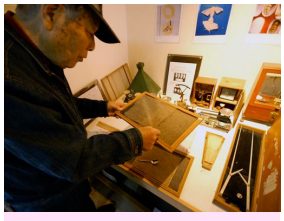
徳島最後の養蚕

今年の夏、たまたま訪れた養蚕農家で徳島県の養蚕が終わりになることを教えられた。養蚕についてはいずれじっくり取材して紹介するつもりだったので、それを聞いたときはショックだった。養蚕はいつから始まったかわからないくらいに古い技術で、おそらく徳島では古墳時代に忌部氏が始めたのではないかと思う。その後戦乱などで途絶えた時期があったとはいえ、千数百年以上続いた産業が、今年で終わろうというのだ。そこで急きょ最後の養蚕の様子を取材することにした。

養蚕は素朴に言えば、蚕に桑を食べさせて繭を収穫するというものだが、実は多くの職業がかかわる複雑な産業だ。蚕が卵から繭になるまでの様子を前後編2回にわけて紹介しようと思う。

蚕種製造業

昆虫は成長が早く、食べる植物の量に対して生産できるたんぱく質の比率が高い生物だ。その性質を利用して、有益な物質を量産する手法を最近では「昆虫工場」と言ったりする。養蚕はまさに昆虫工場なのである。蚕のより良い品種を作り出すためには時代の先端を行くバイオ技術が研究されてきた。2種類の原種を親にして生まれた子が、一代かぎり優れた性質を持つという「一代雑種(F1)」をご存知だろうか。現代では牛や豚などに応用されている。この一代雑種が初めて実用化された動物が蚕だっのだ。当然一般の農家には不可能な技術で、蚕の品種管理と卵の生産をしたのは専門の蚕種製造業者だった。残念ながら徳島県には蚕種業者は残っていないが、徳島市国府町には山野蚕種製造所の建物が残っており往時の様子をしのぶことができる。



▲徳島市国府町・蚕の館(山野蚕種製造所)
放射線による突然変異の研究を全国に先駆けて行なった先端的な蚕種業者だった。いはま博物館・蚕の館として当時の道具などを展示している。

▲山野蚕種製造所・産卵室
原種は委託した農家で育成し、この産卵室で交尾させて卵を生産した。ミスで原種が混ざることがないように、原種ごとに離れた地域の農家に委託したという。蚕種会社の建物は全国的にも遺構が少なく、貴重な文化遺産だ。

▲山野蚕種製造所・貯桑室と氷室
自然の状態では春に1回しか生まれない蚕を年に何度も飼育するために、卵を疑似的に冬の気候にさらさなければならない。電気冷蔵庫がない時代には氷を運び込んだ氷室で卵を保管した。

蚕種業者が卵を冬眠から目覚めさせる作業を「催青(さいせい)」という。卵からかえる時間がまちまちだと、その後の脱皮や繭づくりのタイミングが大きくズレてしまう。農家に蚕を届ける日は決まっていて、その日から逆算して半日の狂いもなく卵がかえるように調整するのだ。

稚蚕飼育所

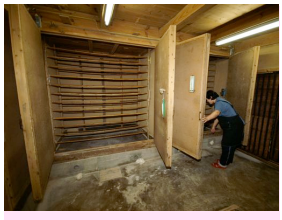
蚕種業者が製造した卵は稚蚕飼育所という施設に送られる。稚蚕とは、蚕の1齢幼虫から3齢幼虫までを言い、この時期は蚕が病気にかかりやすいため、農家ではなく特別な施設でまとめて飼育するのである。稚蚕飼育所はかつて県下各所にあったが、最後の年には東みよし町の秋田稚蚕飼育所が1軒残るのみとなった。

▲稚蚕(1齢幼虫)
卵からかえった直後の1齢幼虫の蚕。色は黒っぽく、毛が生えていることから「毛蚕(けご)」とも呼ばれる。この幼虫が約 24 日間で1万倍の大きさに成長して繭をつくる。

稚蚕飼育所での飼育は2齢幼虫までで、3齢幼虫から農家で飼育される。(他県では3齢の途中まで共同飼育する地域もある。)幼虫は脱皮の直前に活動が止まるのでそのタイミングをみはからって農家に配送する。この作業を「配蚕(はいさん)」といい、稚蚕飼育所の最後の大仕事となる。

▲最後の配蚕
稚蚕は「蚕座紙」という紙でスマキにされて配達される。農家に届く日時はあらかじめ決まっていて、この配蚕の時間帯にすべて蚕の活動が止まるように育てるのが、稚蚕飼育所の技術のみせどころである。

▲秋田稚蚕飼育所の付属桑園
桑畑も県内ではほとんど見かけなくなった。現代では稚蚕には殺菌された人工飼料を与えるのが一般的で、天然の桑葉による稚蚕飼育の技術を伝承してきた秋田稚蚕飼育所は全国的に見ても注目すべき存在だ。



▲東みよし町・秋田稚蚕飼育所の飼育室
押入れのような小部屋を電熱線で加温してこの中で稚蚕を飼う。この方式を「土室電床育(どむろでんしょういく)」という。養蚕県の群馬で開発された装置だが、群馬にはあまり残っていない、とても貴重なもの。

▲美馬市穴吹町・稚蚕共同飼育所
穴吹町にいまも残る稚蚕共同飼育所の建物。この建物は比較的新しくできたもので、「大部屋方式」という方式の飼育所だったと思われる。

■猪口家の上蔟(じょうぞく)

繭作りの準備が整った蚕を「蔟(まぶし)」と呼ばれる紙の枠に移す。この作業を「上蔟」という。数万頭の幼虫が半日~1日のあいだにいっせいに繭作りの体勢になる。作業が遅れると、飼育台で繭を作り始めてしまうので一刻を争う作業だ。
猪口家では上蔟のときだけ、「縄網」という昔ながらの手製の網を使用する。現代ではほとんど使われなくなった養蚕用具だ。

阿波國 すきま漫遊記

VOL.19 養蚕 （後編：壮蚕飼育～製糸）

［取材・文・写真］ 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

猪口家の養蚕

美馬市山川町の養蚕農家、猪口家を知ったのは偶然のことだった。以前から気になる桑畑があって、ある日思い立ってその持ち主を探して訪ねてみた。それが猪口家だった。そこで徳島の養蚕が今年で終わりになることを知った。農協から農家に対して終了が告知されたのが5月。私が訪れたのは8月上旬で、年3回ある飼育の2回目がすでに終わっていた。残るは、「晩秋蚕(ばんしゅうさん)」という9月の飼育1回だけである。無理にお願いして密着取材させてもらった。

前号で紹介した稚蚕飼育所で2齢幼虫の終わりまで育てられた蚕が、農家に届けられたのは孵化から7日目のことだった。幼虫はその日のうちに脱皮して3齢になる。そのあとも2回脱皮し、孵化からだいたい24日目に繭を作る。

▲回転簇(かいてんぞく)

「回転簇」という紙枠に移された蚕は、繭を作る場所を探しながら上へ上へと移動する。1区画に2頭の幼虫が入ってしまうと「玉繭」という不良品になる。蚕が上へ集まるとその重みで回転し、蚕が一箇所に集まるのを防ぐ仕組みだ。

▲5齢幼虫

蚕の1~3齢を「稚蚕(ちさん)」、4~5 齢を「壮蚕(そうさn)」と呼ぶ。この写真は繭を作る2日前くらいの様子だ。蚕は紀元前から家畜として改良されてきたので自然の環境では生きられない。養蚕がなくなれば蚕の姿も見られなくなる。

▲条桑育(じょうそういく)

昭和 35 年ごろから始まった枝ごと給餌する飼育方法。
そのころから、安い外国産繭や化学繊維に対抗するため、養蚕の機械化、大規模化が模索された。しかし徳島で最後まで営農できたのは人力に頼った小規模な養蚕だった。

▲桑の取り入れ

よい繭を作る最も重要な要素は良い桑葉を作ること。
50 年以上、養蚕を専業としてきた猪口さんは「蚕のコトバがわかる」「蚕のことなら目をつぶってもできる」と言うほどの養蚕のプロだ。

猪口家の養蚕の特徴は、部分的にではあるが古い時代の道具を使っていることだ。縄網や藁蔟は民俗資料館などで展示品として見ることはできるが、道具は使われているときにこそ輝いて見える。しかし残念なことに、ここで紹介した道具と仕事は、もう徳島県では見ることができないのである。

徳島県の製糸

農家から出荷された繭は製糸工場で「生糸(きいと)」に加工される。生糸とは繭をほどいて繊維を一定の太さに揃えたもので、糸の原料である。生糸を糸にするには、「精練」といって表面の蛋白質を取り除いたり、「撚糸」といって糸にヨリを掛けたり、染色する行程が必要となる。そうして出来た絹糸を織ってやっと絹織物になる。和服1着分の布を作るには、約98kgの桑葉が必要になると言われている。意外に少ない原料と言えるのではないだろうか。

徳島は関西では有数の養蚕県だった。鴨島には筒井製糸や片倉製糸の大工場があって繁栄したが、いまではその面影を探すのはむずかしい。今年徳島で作られた繭は、長野県の宮坂製糸という製糸会社に出荷された。繭を煮ないで、中のサナギが生きたまま繰り糸する技術を持った工場だ。国内にはもう製糸会社は4社しかなく、関西にはない。

四国で最後まで製糸を続けたのは、高知県の藤村製糸である。大量の繭を扱うには、蚕が蛾にならないように高温でサナギをミイラ化させる「乾繭」という行程が必要となる。乾繭させれば繭は倉庫で保管がきくようになる。美馬市山川町には藤村製糸の乾繭工場が残っている。養蚕王国だった徳島の姿を伝える貴重な産業遺跡だ。

▲選繭台(せんけんだい)

農協の集荷場へと運ばれた繭は、計量され、製糸会社の袋に詰め替えられる。このとき再び選繭台で不良繭を選別する。
山川農協管轄の養蚕農家は2軒。最後の繭は、特別なセレモニーもなく、数人に見送られて静かに出荷された。

▲出荷の朝

回転簇から外して、床に拡げておいた繭を袋詰めする。繭は呼吸をしているので積み重ねると蒸れてしまうのだ。
このとき不良品を選別する。今年は飼育期間が好天に恵まれ例年にない上作で、不良繭が少なかった。

▲藁蔟(わらまぶし)

徳島では「こあら」とも呼ぶ。回転簇が登場する以前の時代に使われていた古い形式の蔟。猪口家では、予定より早く繭を作り始めてしまった蚕を藁蔟に移しておく。藁蔟を使うと、動き回らずにすぐにその場所で繭を作り出すという。

▲生糸

揚返し機から外した生糸。この糸の単位を「綛(かせ)」という。生糸は触るとひんやりとしていて、シュッシュッという音がする。「絹鳴(きぬなり)」という生糸独特の音だ。今、日本国内で売られている絹製品のうち、国産の繭の使用比率は 0.5%程度しかない。

▲揚返し機

繰糸機によって繭からほどかれた生糸を一度やわらかく巻き直して扱いやすくする。この行程を「揚返し(あげかえし)」という。生糸製造の最終工程だ。繰糸機や揚返し機は、美馬市の蚕糸記念館で見ることができる。

▲検定用自動繰糸機

繭は製糸工場へ出荷されると同時に検定所へもサンプルが送られる。検定所には製糸をシミュレーションする繰糸機があって、繭のほどけやすさを調べる。これによって繭の等級が決まり、農家からの買い取り価格が決まったのだ。

▲乾繭工場内部の様子

工場の見回りに来た藤村製糸の会社の人に頼んで工場内を見せてもらった。内部はよく残っている。見モノは、この「多段バンド型移動式繭乾燥機」家ほどもある大きさの機械だ。あまりの大きさのため、繭投入口は2階にある。

▲藤村製糸乾繭工場

敷地は川田駅のすぐ横なので、汽車の窓からよく見える。1923 年にグンゼが建てた工場で、1958 年に藤村製糸が買い取って、2005 年まで操業した。木造の外観は建築当初のまま。木造大架構建築としても凄い迫力がある。

■三好市井川町・下影
日本の棚田百選に選ばれた、県内では有名な棚田だ。30 枚、1.1 ヘクタールの面積、斜度は 1/4 だという。周囲の急傾斜集落の景観を含め、四国らしい景観。

阿波國すきま漫遊記

VOL.20 棚田

［取材・文・写真］　深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

日本の棚田百選

棚田とは傾斜地に段々を築いて作られた田んぼのことだが、厳密にいえば農水省では傾斜1／20以上の田んぼを棚田と定義している。その基準によれば全国の水田の面積の8％は棚田なのだという。もっとも、これから紹介する棚田は傾斜1／4やそれ以上の急傾斜の田んぼだ。

1999年に農水省は「日本の棚田百選」という田んぼを選定した。徳島県では樫原と下影の2箇所が選ばれている。棚田百選に選ばれるには、合計1ヘクタール以上の耕作面積があり、棚田の保全に積極的であるという条件が必要だった。その条件に漏れた田んぼであっても、規模や景観からみて棚田百選級の棚田が県内にはいくつもある。

▲ 上勝町・樫原
日本の棚田百選に選ばれている。景観のすばらしさは横綱の貫録。546枚、5.5 ヘクタールの面積、斜度は1/4。水車小屋が作られたり、保全活動も活発。徳島を代表する棚田だ。

▲ 上勝町・府殿
樫原の棚田からも近い。4.4 ヘクタールもある大規模な棚田。上勝町にはすばらしい棚田が多いが、その中でも屈指のもの。「棚田百選級」の物件。以前の号で紹介した非観光の水車小屋もこの一角にある。

▲ 佐那河内村・東府能
全国の名だたる棚田と比べても遜色ない景観だ。稲刈りの季節になると田んぼで稲を干す「ハデ(はさ掛け)」の風景が美しい。徳島市内から車で30 分程度で行ける場所なので、ぜひ訪れたい。

棚田はどこにある

棚田は吉野川の南側の市町村に多い。その理由は、吉野川の南側は変成帯という地質で急峻な斜面に集落が多いことと、多雨地帯のため水田が作りやすかったことが関係しているのだろう。棚田の法面(のりめん)の築き方には、石垣と土坡(どは)の2通りがあるが、県内の棚田はほとんどが石垣だ。これも変成岩が得やすい地質に大いに関係している。

▲ 那賀町拝宮
石垣の例。拝宮は田んぼの中に家ほどもあるような巨石が点在する「石の集落」。当然、棚田の法面もすべて石積みだ。拝牛の石積みは角度が急でほぼ垂直に近い。

▲ つるぎ町半田東蔭
土坡(どは)の例。このように田んぼの法面を土だけで作ったものを土坡という。土坡の棚田は東日本に多く、石垣の棚田は西日本に多い。

▲三好市白地中尾
湧き水を田に引くとき、そのまま田に入れると水温が低く稲の育ちが悪くなるので、田の縁に小さい水路を作り、水を廻して暖める。「ネキアゼ」と言うそうだ。

▲ 神山町上分江田
最近、菜の花で町おこしをしている神山の棚田。地形上、見晴らしがよく、棚田を一望にできるのがうれしい。神山町には他にも多くの棚田がある。

棚田の価値

棚田の耕作には平地の田の1・6倍の労働が必要だという古い調査がある。大型機械の導入が進んだ現代ではもっと差が広がっているはずだ。単にコメの生産というだけで見たら棚田は効率の悪い場所なのだ。「効率」とは言い換えれば「いかに安くモノを作るか」ということだ。戦後の日本人は効率というモノサシで何もかもを計ろうとしてきた。その代償として、モノサシで計れないストレスという重荷を際限なく背負い込む社会を作ってきた。もし棚田の価値を計ろうと思ったら、まったく違ったモノサシが必要となるだろう。この田を築いた先人の苦労を思い、美しい景観を未来に残していくことに価値を見いだせるような時代は来るのだろうか。

▲ つるぎ町半田東蔭
棚田には小さな田んぼが多い。田植えをしようとしても田が見つからず、牛をどかせたら下から田んぼが出てきたという昔話もあるほど。

▲ 那賀町音谷
個人が耕作している小さな棚田だが、細長い階段のような作りがおもしろい。稲穂が実る時季は、杉山の緑とのコントラストがとくにきれいだ。

▲ 那賀町馬路
まるで城の天守台のような石垣。この上が田んぼになっている。これならイノシシやシカの獣害からの防御も完璧だろう。

▲ 佐那河内村・東府能
等高線そのままに巾着のようなカーブを描く。棚田は、自然を打ち負かすのではなく、自然に逆らわずに作られた農地なのだ。

■阿南市伊島の湿田跡
県内で最大の湿田の跡。10ヘクタールほどもある広大な湿原で野鳥の楽園だ。

阿波國すきま漫遊記

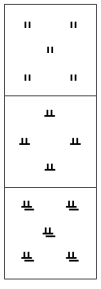
VOL.21 湿田

［取材・文・写真］ 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

田んぼにも種類がある

コメを生産する農地である田んぼ。その田んぼには種類があるというのをご存知だろうか。小学校のころ習った地図記号の田んぼは2本の縦棒だった。しかし昭和の古い地図を見ると田んぼには3種類の記号が使われている。



現代の地図で見ることができるのは乾田だけである。では水田や沼田とはどんな田んぼだったのだろう。地図記号が3種類あったのは、戦前に帝国陸軍が地図を作っていた名残りだという。乾田とは冬ならば戦車などが進軍できる乾いた土地、水田は歩兵なら進軍できるぬかるんだ土地、沼田はまったく進軍できない沼のような場所という区別だった。乾田の対義語「湿田」は水田や沼田の総称である。徳島では湿田を「フケタ」とも言う。

湿田はどこにある？

古い地図で湿田だった場所を訪ねてみても、どこも乾田や畑地に変わっていて昔ながらの湿田はなかなか見つからない。なにしろ、湿田は稲刈りのときにもぬかるんでいるため機械化がむずかしく労力がかかる。そこで他の場所から土を運んで埋め立てたり、排水工事をして水を抜いたりして長い努力の結果、ほとんどの田んぼは乾田に改良されたのだ。そして最後まで改良されなかった田んぼは耕作放棄されて、いまでは葦原などになっている場合が多い。

▲ 香川県豊島の湿田(参考)
香川県で偶然見かけた貴重な湿田。稲刈りのときもぬかるんだままで、手で稲刈りをしていた。何かを引きずったようにみえるのは「田舟」を使った跡。この地域では湿田のことを「ザブタ」と呼ぶそうだ。

湿田跡を訪ねて

県内の湿田跡で最も感動的なのは、伊島の東部にある湿原だろう。伊島は阿南の橘港から連絡船で30分の島だ。集落は島の西側にあり、峠を越えた東側はすべて廃村で田んぼは広大な湿原になっている。

▲ 豊島の湿田の土側溝(参考)
水路と田んぼの高さにほとんど差がないため田んぼから水が抜けにくくなる。これは田んぼで産卵する魚にとって川と往来できる都合のよい構造でもある。田んぼの改良は、生態系を大きく変えてしまうことでもあった。

▲ 伊島の湿田跡
ここはもしかしたら廃村という文脈で語ったほうがいいのかも知れない。見渡す限り人間の活動の気配がなく、物音も聞こえない。人類が滅亡したら世界はこんな風景になるのではと夢想してしまうような場所だ。

▲ 鳴門市瀬戸町の沼田跡
間近に見てここが田んぼだったとは信じられない。近在の3軒の農家がここで稲を作ったという。腰まで泥にめりこむ深い田んぼで、海に近いため海水が逆流しないように水門の開け閉めが大変だったという。

▲ 阿南市福井町の湿田跡
奥に見える丘を切り崩して湿田を埋め立てて乾田にしたという。中央に見える池は、海水が水路に入らないようにする緩衝池で「潮池(しおいけ)」という。排水ポンプがない時代の工夫だ。

湿田での農作業

腰まで泥に沈んだ状態で動きまわることを想像してみてほしい。湿田での農作業がいかに過酷なものかわかるだろう。それどころか底なし沼のような場所もあり「あのひとが戻ってこんと思ったら、(全身沈んでしまって、頭に載せた)傘だけ残っとった」という怖い昔ばなしがあるほどだ。そうなると農作業も命懸けである。そんな田んぼには「ワタリギ」という丸太が沈めてあって、その上を足でさぐりながら歩いたという。また稲刈りのときには「田舟(たぶね)」という小舟に刈り取った稲束を載せて引いた。かつて湿田を持っていた農家に行くと田舟が残っている場合があるので何軒かでお願いして見せてもらった。湿田での農作業も今はもう遠い昔ばなしになりつつある。

▲ 沼田で使った四ツくまで(鍬)
柄が長いのは沼田の中で一箇所から動かずに広い範囲を耕すための工夫だ。また泥から抜けられなくなったときも杖のように使うこともあった。それでも動けないときは稲にしがみついたという。

▲ 小型の田舟(阿南市福井町)
100x60x20(cm)の小型の田舟。現在も土を運んだりするのに猫車のように使うことがあるという。田舟は地元の大工が作るため、地域ごとに少しずつ構造や大きさが違っていて興味深い。

▲ 中型の田舟(徳島市八万町)
142x79x22(cm)の中型の田舟。八万町の阿波銀グラウンドの場所にあった沼田で使われていた。第二室戸台風で園瀬川が決壊したときは、このあたり一面が水害にあったが、田舟を使って孤立した人を救助したという。

▲ 大型の田舟(鳴門市瀬戸町)
190x90x22(cm)の大型の田舟。底面はFRP樹脂で補強されていて、とてもしっかりした造りだ。船大工が作ったのではないだろうか。遊びで海に漕ぎ出したこともあるという。島田島には湿田の跡がたくさん残っている。

阿波國すきま漫遊記

VOL.22 橘鉱山ベルトコンベア

［取材・文・写真］　深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

■阿南市桑野町付近の景観
鉄骨トラスの橋脚がどこまでも続く姿は壮観だ。この風景が見られるのもあとわずかになった。

徳島のミニ餘部鉄橋

ＪＲ山陰本線に餘部（あまるべ）鉄橋という明治時代に作られた鉄道橋がある。その鉄橋の掛け替えが決まったとき、最後の風景を見ようと全国から観光客が押し寄せた。餘部鉄橋は細い鉄材を組み上げたトラス橋脚の橋だ。鉄骨のトラスやアーチ構造は力学的な機能美をもつだけでなく、ディテールの細かさやレトロ感によって情緒的な景観を作り出し、山陰を代表する観光地にもなっていた。

さて、「徳島のミニ餘部鉄橋」と言ってもいいような橋梁が阿南にある。橘鉱山から橘港を結ぶ、廣浦鉱業ベルトコンベアだ。国道５５号線、１９５線、県道２４号線をまたいでいるので、県南方面に行くときに気付いている人も多いだろう。だがその取り壊しが決まり、姿が見れるのもあとわずかになったことはあまり知られていないようだ。この号が店頭に並ぶころにはもう撤去が進んでいるかも知れない。

▲ 平成 17 年ごろの様子
かつてベルトコンベアにはかまぼこ状の屋根が載せられていた。台風で屋根が飛ぶ被害が出たことから、その後撤去され、平成 22 年2月現在、ほとんどの部分で屋根は残っていない。

廣浦鉱業・橘鉱山

このベルトコンベアを敷設したのは阿南鉱業という会社だった。昭和36年に着工、同38年完成。石灰石は主に大阪のセメント工場に出荷され、大阪方面の建設需要に使われた。昭和47年に鉱山は現在の所有者である廣浦鉱業に引き継がれ、ベルトコンベアも平成13年まで使われた。

鉱山から掘り出された鉱石から、商品価値の高い石を選別する作業を「選鉱」という。かつては鉱山から掘り出した鉱石を工場に運んでから選鉱していたが、現在では鉱山側で選鉱するようになったことと、セメント以外の高付加価値商品への転換により、ベルトコンベアでの大量輸送が必要なくなり、トラック輸送に切り替えられた。もちろん背景には国内でのセメント需要の落ち込みもある。

ケーブルベルトコンベア

セメントはかつて阿南市の花形産業でもあった。その象徴ともいえるベルトコンベアが人知れず消えていくのはあまりにもさびしい。そこで廣浦鉱業に特別にお願いして、設備を詳しく見せてもらった。

普通、私たちが想像するベルトコンベアは工場の生産ラインや砕石場などで見かけるものだが、橘鉱山のベルトコンベアはそうした常識とはかけ離れた構造のものだ。なんと鉱山から出荷場までの４・６キロが継ぎ目なしの１本のベルトで結ばれているのである。

動力は工場側にある巨大なモーター１機のみでケーブルを駆動している。ベルトはケーブルの上に載っているだけで張力はかからない。この方式をケーブルベルトコンベア（ＣＢＣ）というのだそうだ。

▲ 鉱山側の破砕設備
採掘した鉱石は破砕機に投入され、一定の大きさに砕かれてからベルトコンベアに載せられた。採掘現場と破砕機の間は、55 台の循環式のトロッコで結ばれていた。

▲ ケーブルとベルト
上段が鉱石を運ぶ面で下段は復路。ベルトには両面にケーブルをはめる溝があり、復路でもケーブルの上に載って鉱山側に戻ってゆく。

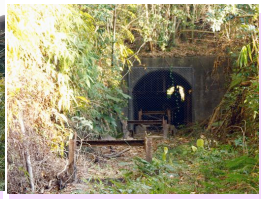
▲ 巨大モーター
工場側にある巨大電動機。120m/ 分、300t/ 時の搬送能力があった。ケーブルベルトコンベアはの設備はロープウエイやケーブルカーの構造に近い印象のものだ。

▲ 駐車場に再利用されたベルト
ベルトコンベアの近くの駐車場で、草除けマットの代わりに使われていたベルトを見つけた。ベルトは頻繁に切れ、このように継いで補修された。ベルトは1mで1万円もしたという。

▲ 平成 20 年ごろの様子
下を通過する道には橋げたが低い箇所もあった。トラックが引っかかったり、最近では救急車が天井をこすったりしたという。現在、この部分は撤去されている。

▲ 国道 195 号線付近
区間で唯一の登り勾配がある箇所。開業当初は、耕作中の水田の上を通過していたが、鉱石がこぼれ落ちたりすることから、通過部分の田んぼを鉱山が買い上げた。

▲ 野を越え山を越え
ベルトが切れたりケーブルが脱索することがよくあり、始業前には保線員が全経路を歩いて確認したという。山林を通過する場所では、成長の早いタケノコには特に注意が必要だったとか。



▲ トンネル
ルートには6箇所のトンネルがあり、その延長は約2.9 キロにも及ぶ。これは最も短いトンネルで約 60 m。トンネルの入口は鉄柵で塞がれていて入ることはできない。

■鳴門市撫養町立岩

肥壺を知らない人が見たら、戦争中のトーチカを連想するかもしれない。
撫養の立岩と里浦には多くの肥壺が残っているが、これはその中でも特に繊細な仕上げがされた逸品だ。柔らかい屋根のカーブと、フタの縁の面取りのエッジ感が対照的で、左官職人の腕の良さがしのばれる。

阿波國すきま漫遊記

VOL.23(最終回) 肥壺

［取材・文・写真］ 深草 縁夫

関東出身・徳島在住のサラリーマン。2000 年からサイト『日本すきま漫遊記』を開設・公開。日本各地の寺・神社を中心として、一般には大々的に取りだたされることのないようなマイナー観光スポットをめぐり紹介している。■日本すきま漫遊記 http://www.sukima.com

肥壺とは

「肥壺(こえつぼ)」あるいは「肥溜(こえだめ)」という言葉は、現代でも比喩として使われるが、実物を知らない人も多いのではないだろうか。肥溜とは、人の排泄物＝屎尿(しにょう)を発酵させて肥料にする設備である。辞書の上では「肥壺」は「壺形の肥溜」の意味だが、徳島ではコンクリ製の肥溜のことも肥壺と呼ぶことが多い。

▲ 徳島市上八万町

円平面、切妻屋根の肥壺。下肥は水田に使われた。下肥を作るには嫌気性細菌の発酵作用を利用して、寄生虫卵や病原菌を死滅させるのがよいとされているが、必ずしも守られてはいなかったようだ。

▲ 阿波市市場町切幡

よく「肥壺に落ちた」という話を聞くが、これは私があわや落ちそうになった物件。2つのかめが埋めてあるのだが、手前のかめは枯れ草に覆われていて見えなかった。写真では撮影のために枯れ草を取り除いた。

▲ 徳島市渋野町

雑草に覆われていて、道からは見つけにくい物件。後ろにわずかに見えるコンクリの箱状のものは、大型の肥壺だ。下肥は水で倍くらいに薄めて使ったそうで、このかめは希釈用だったかもしれない。

▲ 鳴門市北灘町櫛木

古い形式の肥壺。国道 11 号バイパスから見え、肥壺の語源がよくわかる。大谷焼の大がめは、藍が衰退したあとも肥壺として使われた。耕うん機をぶつけて割ってしまうことが多かったという。

肥壺が使われていたのは、今から50年くらい前まで。そのころはまだ水洗便所がなく、屎尿はすべて肥料としてリサイクルされていた。廃棄物ではなくて資源だから汲み取る側が対価を払っていたのだ。汲み取り先の家を「コエド(肥床)」と言って、決まった契約先からしか汲み取れなかった。料亭のように栄養のあるものを食べる家は肥料の価値も高いからと好まれたという。

大都市の屎尿には仲買人もいて商品として流通した。鳴門市に多くの肥壺があるのは、阪神方面から肥船という船で屎尿を売りにきたからだ。中には水で薄めた屎尿を売る者もいて、買う側も騙されまいと指の先を入れて舐めて確かめる強者もいたとか。大変な時代だったが、食に関しては究極のリサイクル社会だったともいえるだろう。

▲ 徳島市上八万町

四角平面、切妻屋根の5連式の大型物件。地域の農家が共同で使用したという。今は花壇に再利用されているので気付きにくい。ここは「ジゾウサンノマエ」という辻で、牛馬の墓場にも使われた場所だ。

▲ 鳴門市撫養町里浦

四角平面、片流れ屋根の3連式の物件。ずいぶんたくさんの下肥を貯えられただろう。阪神方面の肥船は粟津港に着き、そこからは農家の自家用の高瀬舟に積み替えて用水路を使って畑まで運搬したという。

▲ 鳴門市撫養町里浦

四角平面、陸屋根で、地表に出ている部分が多い珍しい肥壺。現在は周囲はサツマイモ畑だが、下肥は主に麦畑に使ったという。麦畑といっても小麦ではなく、炊飯用の大麦だった。

▲ 鳴門市撫養町里浦

円平面、円錐屋根の肥壺は里浦に多く見られる。これはフタ部分が大きくて、汲み出しやすかっただろう。肥壺の深さは大人の背くらいあるという。子供が落ちたりすると危ないので、本来は木のフタがされる。

私が道ばたにある肥壺に気がついたのは半年前のことだった。以来、田園地帯を通るときに注意するようにして、30基以上の肥壺を見てきた。ときには通い慣れた道で発見することもある。半年前まで見えなかったものが突然見えるようになるという体験は自分でも不思議な感覚だ。このコラムを読んでくれた読者の方も、今日から肥壺が見えるようになるかもしれない。

おわりに

さて、2年間続いたこのコラムも今月で最終回。徳島にはまだ紹介していない「すきま物件」がいくつもあるし、私が気付いていないジャンルもたくさんあるだろう。だからこれからも、徳島のすきまをどこまでもディープに探索していくつもりだ。そしていつかまた誌面でお目にかかることもあるかもしれない。そのときまでごきげんよう。

▲ 徳島市渋野町

地上に出ている部分がわずかしかなく見つけにくい物件。渋野町から徳島中心街まで 10 km の道のり、それを大八車で汲み取りに行った。途中、何ヶ所か上り坂あるところでは、お嫁さんや子供が出迎えて後ろを押したという。

▲ 肥びしゃく

下肥をくむための専用のひしゃく。とても丁寧に作られていて、持ってみると柄のバランスもよく手になじむ。汲み取りから帰ってきたら肥たご(桶)や、肥びしゃくはすぐに洗っておく。

▲ 徳島市渋野町

四角平面、切妻屋根は、渋野、八多方面に多い。いまは柑橘畑が多いが、昔は水田だった。この家では、水田には下肥は使わず、麦畑にだけ使ったという。水田に使う家は、肥びしゃくで豪快に振りまいたそうだ。

▲ 小松島市田浦町

八角平面、宝形屋根の肥壺。八角形平面は他にも見たことがあるが、宝形屋根は珍しい。傷みが激しく、中が土で埋まっている。田浦町の肥壺は形のバリエーションが多く、個性的だ。